

紀州徳川家伝来の琵琶について

Biwa of the Heirloom of Kishu-Tokugawa Family

薦田治子

KOMODA Haruko

はじめに

①調査の対象

②調査の方法

③調査結果

A.大型の雅楽琵琶, B.中型の雅楽琵琶とその構造,

C.平家琵琶の特徴, D.小型の雅楽琵琶, E.特殊な琵琶

おわりに

【論文要旨】

本論文は平成21年度に国立歴史民俗博物館で行われた紀州徳川家伝来楽器コレクションの琵琶の調査の報告と、その結果に関する論考である。今回の調査の対象としたのは、同コレクション内の23面の琵琶のうち、中国琵琶を除く日本の琵琶22面である。

調査の第1の目的は、これらの琵琶の楽器としての特徴を考える上での基礎的なデータを観察と計測によって、提供することである。第2の目的は、琵琶のX線撮影や、小型カメラによる槽内調査により、琵琶の構造や製作技術について明らかにすることである。第3の目的は、やはり小型カメラを用いて、槽内に記された墨書を観察することである。琵琶槽内にはしばしば楽器の製作や修理に関する情報が墨書されており、それらは入替や作成が可能な付属文書の情報よりは信憑性が高い。

こうした目的のもとに調査を行った結果以下のようなことが明らかになった。

まず、測定結果から、琵琶を大きさによって大中小の三つのグループに分けることが適当と考えられた。80cm以上90cm未満の中型の琵琶の数が8面に上り、この大きさの琵琶も大型のものと同様よく用いられていた可能性が指摘できた。また、従来、中型の琵琶や80cm未満の小型の琵琶について論じられることは少なかったが、小型の琵琶は数も少なく、用いられ方も特殊で、今後は中型とは別に考えるべきであろう。

次に琵琶の構造については、解体している雲鶴(H-46-103)によって基本的な構造を観察することができ、小型カメラによる槽内観察やX線撮影によって、特殊な構造を持つ琵琶を見出すことができた。

さらに、5柱の接着痕から平家琵琶として使われたことがあきらかな3面の琵琶は、文書類や撥の形から判断して、雅楽琵琶として利用するためにこのコレクションに加えられたと考えられるが、平家琵琶は基本的には雅楽の中型琵琶と違いはなく、その相違は、撥面の月装飾、柱、乗弦といった付属的な部分にあり、十分転用が可能であることが判明した。

そのほか、細部の製作上の工夫や修理の仕方など、多くのことが観察から明らかになった。また平家琵琶のものとされていた撥が、薩摩盲僧琵琶の撥であることが判明し、薩摩琵琶の楽器史の一面があきらかになった。

本調査の計測結果は様々な活用方法があると思う。また、槽内観察やX線撮影の有効性が確認されたことにより、今後の琵琶の楽器調査の方向も示せたと思う。

【キーワード】 雅楽琵琶, 平家琵琶, 槽内銘, 楽器計測, 楽器学

はじめに

本論文は平成21年度に国立歴史民俗博物館で行われた紀州徳川家伝来楽器コレクションの琵琶の調査の報告と、その結果に関する論考である。今回の調査の対象としたのは、同コレクション内の23面の琵琶のうち、中国琵琶を除く日本の琵琶22面である⁽¹⁾。

調査の第1の目的は、これらの琵琶の楽器としての特徴を考える上での基礎的なデータを、観察と計測によって、提供することである。紀州徳川家伝来楽器コレクションの琵琶は、彦根城博物館所蔵の井伊家伝来楽器に含まれる29面の琵琶とならんで、質量ともにきわめて充実しており、これらを計測することにより、江戸時代に用いられていた雅楽琵琶の標準的な形や大きさを知ることができる。それらの基礎的なデータがあつて初めて、楽琵琶の大きさの問題や、雅楽琵琶と平家琵琶の関係や、制作年代と琵琶の形態の関係等の問題を論じることが可能になる。

第2の目的は、琵琶のX線撮影や、小型カメラによる槽内調査により、琵琶の構造や製作技術について明らかにすることである。弦を張るために強い力のかかる覆手がどのように腹板に接合されているか、腹板の曲面を補強し、その振動を槽に伝える虹（渡し）と支柱（魂柱）がどのような形態をしているか、槽内部の削り方はどうなっているか、こういった問題は、従来、琵琶の解体修理をする際にしか調べることができなかつた点である。

第3の目的は、やはり小型カメラを用いて、槽内に記された墨書を観察することである。琵琶槽内にはしばしば楽器の製作や修理に関する情報が墨書されている。もちろん付属文書からもこうした情報は得られるのだが、文書は他の楽器のものと入れ替わったり、あるいは売買の都合に応じて書き換えられたりする可能性も皆無とはいえない。その意味では槽内の墨書の情報は付属文書よりはかなり信憑性が高いといえる。また、付属文書にはない情報が得られる可能性も高い。

①……………調査の対象

表1に調査の対象資料とした琵琶の概要と調査方法を示す。計22面の琵琶は、おもに大きさを基準に以下の5つのグループに分けた。

「雅楽琵琶大型」	（全長90cm以上）	10面
「雅楽琵琶中型」 ⁽²⁾	（全長80以上90cm未満）	6面
「平家琵琶」	（第5柱の接着痕を持つもの）	3面
「雅楽琵琶小型」	（全長80cm未満）	2面
「特殊な琵琶」	（特殊な形態を持つもの）	1面

表中、「平家琵琶」は大きさの似る「雅楽琵琶中型」の次に、「特殊な琵琶」は全長が最も小さいので最右欄に記した。各グループ内では、全長の値が大きい順に左から右に並べた。

各琵琶には、国立歴史民俗博物館の所蔵番号「H-46-○」と琵琶の銘を記した。

表1 調査した琵琶の概要と調査方法一覧

資料	分類	雅楽(大型)										雅楽(中型)
	所蔵番号H-46-○	95	92	101	97	99	113	98	108	106	94	105
	銘	朝陽	白鳳	嘉吉丸	美女	花園	白菊	筑夫島	白神	嘯月	箕面	雲上
	成立(伝承)	1203奉納	677	1442作	1353作	室町	1817作	室町		1625	1138作	1822以前
	全長(乗竹上)[2]cm	99.2	99.1	99.0	98.6	97.0	96.2	95.5	94.3	93.6	90.4	87.3
	胴幅[20w]cm	40.9	40.8	40.8	40.8	39.5	40.1	38.7	38.5	38.6	35.7	33.3
	胴厚[21d]cm	7.9	7.7	7.2	7.9	8.7	7.9	6.7	7.8	7.8	7.1	6.4
	隠月 cm	4.3×5.0	5.4×5.7 (4.6)	4.1×5.2	4.0×6.2	4.0×6.1	—	4.8×5.2	4.1×8.4	3.0×6.7	3.9×7.7	3.1×6.4
	重さ kg	4.76	6.3	5.38	5.36	5.02	5.54	3.78	4.46	4.42	3.46	2.98
	槽材(歴博図録)	唐桑製か	花欄製か	花欄製か	紫藤香製か	唐木製か	花欄製か	花欄製か	楠製か	唐木製か	鉄刀木製か	黒檀製か
概要	頸と反手の角度	92°	94°	97°	95°	96°	97°	95°	97°	99°	97°	98°
	撥素材	ツゲ	ツゲ								ツゲ	
	撥のサイズ	19.6×6.9	19.3×7.1									19.5×7.2
	柱(現存数/総数)	4/4	1/4	4/4	0/4	4/4	0/4	3/4	1/4	3/4	3/4	0/4
	別の柱		4個	1個		2個						4個
	撥面の月								月痕?	銀製満月	満月痕?	三日月痕?
	乗弦高 cm	1.7	1.6	1.4	1.5	1.46	1.3	1.65	1.87	1.1	1.56	—
	付属文書数 (*槽内写のあるもの)	8	13*	3	11*	6	1	11	7	1	6*	0
	槽内調査		CCD	赤外線	CCD			赤外線				CCD
	X線		撮影		撮影			撮影				
計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	

資料	分類	雅楽(中型)					平家			雅楽(小型)		特殊
	所蔵番号H-46-○	103	96	111	109	102	104	107	100	93	112	110
	銘	雲鶴	小嵐	満月	野路	千歳丸	鶴吟	武蔵野	文殊丸	小白菊	花月	小車
	成立(伝承)	1606作	阮咸墓中	寛文頃		1597作	江戸前期	1609	貞敏獅子丸	平安	17世紀後半	
	全長(乗竹上)[2]cm	86.8	86.9	84.5	83.7	83.4	85.7	83.4	79.2	77.5	76.1	62.7
	胴幅[20w]cm	35.0	35.7	33.6	32.4	33.5	33.2	33.2	29.9	31.6	29.6	23.8
	胴厚[21d]cm	—	6.4	6.4	6.2	6.5	6.5	—	6.4	5.6	5.6	5.3
	隠月 cm	4.2×5.8	4.7×5.5	4.2×5.5	3.8×6.5	4.0×6.3	4.3×6.2	3.8×6.5	3.7×6.0	3.7×—	4.5×6.7	3.3×4.5
	重さ kg	—	2.44	4.12	4.1	2.74	4.2	4.24	3.0	2.38	2.36	1.0
	槽材(歴博図録)	唐木製か	唐桑製か	花欄製か	紫檀製か	栗製か	紫檀製か	古檜製か	花欄製か	唐桑製か	花欄製か	栗製か
概要	頸と反手の角度	分解	94°	93°	98°	100°	96°	分解	93°	95°	97°	94°
	撥素材	ベッコウ			ツゲ		ツゲ			水牛		ツゲ
	撥のサイズ	19.4×7.0			19.5×7.0		19.1×7.2			18.4×5.8		17.9×6.0
	柱(現存数/総数)	0/4	2/4	0/4	2/4	0/4	3/5	2/5	0/5	1/4	3/4	4/4
	別の柱			3個	1個	1個			3個	5個		
	撥面の月				満月痕		満月痕		銀製満月			
	乗弦高 cm	欠	1.6	2.1	1.8	1.4	1.7	2.3	1.8	1.38	1.9	1.03
	付属文書数 (*槽内写のあるもの)	8*	7*	2	1	0	17	6	4*	8	4	0
	槽内調査											
	X線											
計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	計測と観察	

表では、まず、「概要」として、成立年代に関する情報や伝承、琵琶の大きさ（全長、胴の幅、胴の厚さ）や重さや頸の角度、以下の論考で問題になる形態上の特徴（柱数、隠月の大きさ、撥面の月、乗弦（上駒）の高さなど）、付属する撥や文書について記入した。次に、「調査方法」の欄に、どのような調査を行ったかを琵琶ごとに記入した。

なお、ここで琵琶の基本的な構造について簡単に説明しておこう。琵琶は、4つの主要部分（槽、腹板、頸、反手）と6つの小部分（転手、覆手、乗弦、乗竹、柱、弦）からなっている（図1参照）。各部の名称は伝書により小異があるが、ここでは、『日本音楽大事典』[田辺・平野1989:294]に従う。以下の説明中の「上下」は図1の上下と一致する。

主要部分の中でも、最も重要なのは、胴（共鳴胴）を形作る槽（「甲」とも）である。堅くて厚い材木をくりぬいて作られ、唐木と呼ばれるシタンやカリンのような輸入材がこのまされる。一木で作られる直甲が上等だが、二枚接ぎ、三枚接ぎのものもあり、これを剥甲⁽³⁾という。写真17は三枚接ぎの槽の例である。槽の外側には頸との接合部（匡口）より少し下がったところから下向きに山型を彫り出す。これを遠山^{とおやま/えんざん}という。胴の側面は磯^{いそ}と呼ばれ、下方に落帯^{らくたい}という革を貼る。

腹板^{ふくばん}は、槽に蓋をするようにかぶせる表板のことで、中央にむけてわずかに膨らんでいる。上方左右に二つの響孔の半月^{はんげつ}があり、下方の覆手の陰には隠月^{いんげつ}とよばれる響孔がある（写真19）。隠月の縁が斜めに切られているのは、演奏しないときに撥を左側から差し込んで置くためである。撥が当たる部分には撥革^{ばちかわ}が貼られ、この部分を撥面^{ばちめん}といい、しばしば琵琶の銘にふさわしい絵が描かれる。槽内部に「虱^{にじ}」と呼ばれる横木を渡し、そのうえに腹板を接着する。横木の中央にはちょうどバイオリンの魂柱のような支柱^{ちゅうちゅう}が立てられている（写真18）。

撥面の下に弦を固定するための覆手^{ふくじゆ}が付けられている（写真20）。隠月を覆うように、付けられていることからこの名がある。覆手も唐木で作られる。弦を通す通弦孔^{つげんこう}の周囲には、象牙や水牛を用いて猪目型の装飾が施される。

頸^{しやくび}は、鹿頸（ししくび、しをくびとも）ともいい、やはり唐木が良いとされる。槽上端に彫られた溝に頸下端を差し込み、腹板をかぶせて胴に接着する。接続部分である匡口^{きやうぐち}は側面で見ると腹板側が5mmほど高くなっている。頸の上端、反手との接続部分は、猿尾^{えんび}と呼ばれるふくらみがあり、反手との接着面が大きくなるように工夫されている（写真22）。頸には4つの柱が付属する。柱にはヒノキが用いられるが、カヤと記す伝書もある。第1柱は開放弦の長2度上に、第2柱から第4柱までは順に半音間隔で頸の上に付けられる。平家琵琶は、第5柱を付けるがその位置は腹板上である。

反手は、琵琶の上端にあつて転手（糸巻）を差し込む部分で、通常はツゲが用いられる（写真23）。両側から頸を挟むようにして琵琶本体に接着する。接着部と反対の端は、海老の尾の形に似ていることから海老尾^{かいろうび}と呼ばれる。雅楽の伝書類では、反手や海老尾の部位が必ずしも明確ではないが、ここでは、ツゲ材で作られた部品全体を反手、海老尾はその一部とみなすことにする。弦を巻きつけた転手先端が納められる空間を弦蔵^{げんぞう}、その両側の反手の材を弦門^{げんもん}という。反手は海老尾の付け根から頸との接着部分に向けて、幅、厚みとも増す。雅楽琵琶をはじめ日本の琵琶は、反手が頸に対して直角に近く後方に向かって付けられており、曲頸琵琶というグループに分類される。反手の先端、頸の上端が合うところに乗弦^{じやうげん}という上駒が付けられる（写真31、32）。乗弦にはシタン

がよく用いられる。乗弦前面には弦を通す溝が切られている。弦門の端から乗弦にかけて^{じょうちく}乗竹とよばれる煤竹が貼り付けられているのは、弦蔵を出た弦が、頸材や乗弦材の角に直接当たって擦り切れなため工夫である。

^{てんじゆ}転手は、唐木で作られる（写真 24）。八角の紡錘形をしており、糸蔵に差し込まれる部分は角をとって円柱形になっている。4本の転手は、上から見れば平行に、正面から見れば水平に、反手に差し込まれる。

撥はツゲで作られ、小さく薄い。撥先両端は直線あるいは曲線で角を落としてあるので、しゃもじのような形をしている。握りの部分に猪目型の孔が三つないし一つ透かされている。

②……………調査の方法

本調査では、計測と観察を対象としたすべての琵琶について行い、また、小型カメラによる槽内観察を5面について、X線撮影を3面について行った（表1 調査方法欄参照）。

(1) 計測

琵琶は、曲面を多く含む複雑な形態をした楽器で、その計測方法もまちまちである。ここで、図1に従って本調査で用いた計測方法を説明する。まず長さ length の計測の基準となる垂線 (l) を決め、それに従って他の計測方向を決定した。琵琶を反手が上に、覆手が下になるように立て、側面から見て腹板と槽の接続する線と平行に垂線 (l) を置いた。反手に関しては、海老尾先を上とし、弦蔵上面に垂線 (l) を置いた（図1参照）。琵琶は反手が大きく後方に曲がっているため、反手部分は別に垂線を設定した。

次に、本体部分と反手部分それぞれに計測位置を決め、計測番号を付した（以下 [] で示す）。その上で各計測位置の長さ (l)、幅 (w)、厚さ (d) を必用に応じて計測した。計測位置と計測位置番号を図1に平家琵琶を例にして示す。雅楽琵琶ではなく平家琵琶を例にしたのは、基本的な構造は変わらないものの、平家琵琶のほうが雅楽琵琶より計測箇所が多いからである。図1の矢印は計測の起点と方向を示し、番号は計測位置を示し、本小稿末の表3の計測番号と対応する。

以下に計測に関する細かい手順を示しておく。

① 長さ(l)の計測

数値は、琵琶本体（図1の「本体部分」欄）では琵琶下端を起点とし、反手（図1の「反手部分」欄）では海老尾先を起点とし、その計測位置までの値を示す。

[全長と最大値] 琵琶を立てると、海老尾先 [1] で、琵琶の長さ (l) は最大になる。しかし、海老尾先の高さは計測上誤差が生じやすいのと、海老尾の形状によって値が大きく変わってくるので、琵琶本体の大きさを考える上では、乗竹上 [2] までの値が都合がよい。本コレクションの一番古い目録である島根目録 [1956]⁽⁴⁾ も、最も新しい目録である歴博図録 [2004]⁽⁵⁾ も全長の数値はこれに近いので、本調査でも乗竹上までを琵琶の「全長」として扱う。

[各部分の長さ] l は、起点から各計測位置までの距離を測っているため、各部分の個別の長さは、

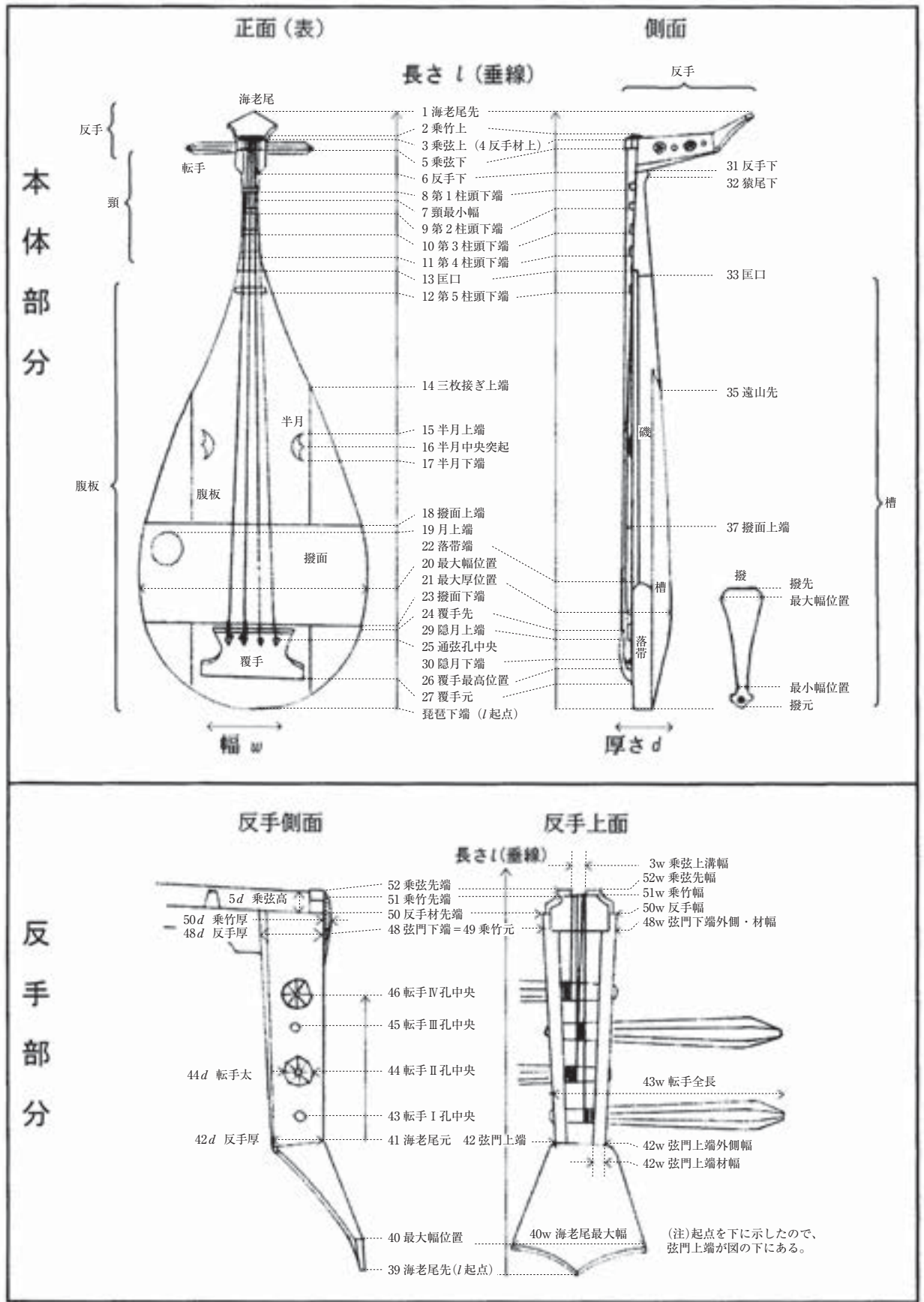


図1 琵琶各部の名称と計測位置

引き算によって求めることになる。例：

有効弦長 = 乗弦下の値[5] - 覆手先の値[24]

第1柱と第2柱の距離 = 第1柱下端[8] - 第2柱下端[9]

半月長さ = 半月上端[15] - 半月下端[17]

[転手孔中央位置] 「反手」の *l* 欄で、「転手孔中央位置」[43~46] は、海老尾先から計測することが難しいので、起点が海老尾元[41]となっている。

② 幅(*w.*)の計測

幅の数値は、各計測位置での幅を計測したものだが、何の幅かを明確にするために「計測個所」に名称を与えた。

[乗弦上の *w.*] 乗弦上端 [3*w*] では、乗弦本体の幅と、乗弦に設けられた溝の幅の2ヶ所を計測しているので、計測個所欄には「乗弦先幅」「乗弦上溝幅」として、計測個所を明確にした。

[半月間の *w.*] 左右の半月間の距離を上端 [15*w*] と中央 [16*w*] と下端 [17*w*] の3ヶ所で測定した。中央 [16*w*] は、半月中央の突起端間を測定している。

[曲面の測定] 曲面になっている場合、直線距離でなく、曲面に沿って計測したものがあり、それらは計測表において「沿」を付記しある。例：撥面上端 [18*w*]、腹板最大幅 [20*w*] など。

[中央板幅 18*w*] 腹板は3枚の板を接いで作られているが、その中央の板の幅を撥革上端位置で測定した。

③ 厚さ(*d.*)の計測

厚さの数値も幅同様、各計測位置における厚さ(奥行き・高さ)を計測しているが、何の厚さ(奥行き・高さ)かがわかるように「計測個所」に名称を与えた。

[16*d*半月孔深] は、半月中央突起位置で、腹板表面から槽底面までの距離を測ったものである。

[21*d*胴の最大厚] では、全体の厚さ、腹板の膨らみ、腹板の厚さ、磯の厚さ、槽の膨らみの5つの値を計測している。磯は、腹板と甲両方を含む琵琶の胴の側面の部分である。腹板の膨らみ と、磯と、槽の膨らみを足した合計が胴全体の厚さとなる。

④ 反手部分(反手材, 乗弦, 乗竹, 転手)

「反手」は弦門(弦蔵)周辺の部分をさす。厳密には、弦門を持つ部材の名称だが、ここでは特に断らない限り、乗竹、乗弦などの付属品を含めて考える。特に付属品を含まない部分だけを示したいときには「反手材」と呼ぶ。*l* は海老尾先を起点とし、材に沿って測定する。

[反手全長 38] 反手全長は、海老尾先から乗弦先端までの直線距離とする。海老尾は、弦門に対してやや斜めについているので、材上面に沿って計った乗弦先端 [52] の値よりは少し小さくなる。

[元・先・端] 弦門に近い部分を「元」とし、遠い部位を「先・端」とした(例：海老尾先 39, 乗弦元 50*w*)。弦門本体については、海老尾に近い端を「弦門上端 42」, 乗弦に近い端を「弦門下端 48」と名付けた。なお、図1では、計測の起点が下になるように示したので、図の上では弦門上端が下に、弦門下端が上になっている(以上の計測方法は[薦田 2004b]に準ずる)。

(2) 槽内観察

従来、槽内部の調査は、解体修理にあわせて行われるのが一般的であった。たとえば、彦根城博

物館が所蔵する井伊家伝来雅楽器についての成果がある〔斎藤1988, 2002, 2009〕。しかし、それでは修理の必要ない琵琶については、貴重な槽内の情報が得られない。今日では、小型カメラやX線撮影やCTスキャンなどの技術によって、少しずつその可能性が開かれてきたが、琵琶については、そうした研究はまだあまり行われていない。⁽⁶⁾

今回は、まずφ6.9mm先端可動式ビデオ内視鏡VJ(ケーブル長3m・赤外線仕様)を用いてみたが、カメラが太すぎる上にケーブルも長すぎて、琵琶の調査には不向きであった。そこで、φ5.5mm工業用ビデオ内視鏡VZ(ケーブル長2m・赤外線仕様)を用いたが、画像が暗く必ずしも槽内の様子がよく見えなかった。最終的にはCCDカメラ(φ7.0mm・ケーブル長1m、写真1)と白色ダイオードの光源を、琵琶腹板上の半月または隠月から、琵琶槽内に入れて、モニターに映像を映して、観察を行った。シリコンの薄片で音孔周囲を養生するか、カメラと光源のコードにシリコンのテープを巻くなどして、楽器の損傷を防ぐ配慮をした。



写真1 CCDカメラ

槽内の墨書は、木材の経年変化による変色や、ホコリや汚れなどのために、必ずしも見やすくない。また、上記の機材は広角レンズを使用しているため、モニター上で、かなり字にゆがみが出る。したがって、槽内墨書調査は時間をかけて、じっくり観察する必要がある。また槽内の見たい場所へカメラを送り込むためには多少の技術も必要である。そこで、練習用の琵琶を作成し、槽内にCCDカメラを入れる練習をした上で、槽内観察に臨んだ。しかし、今回の調査では、必ずしも墨書の判読が十分に行えなかった。今後の課題である。

また、槽内壁にカメラができるだけ触れないようにするためには、琵琶を立ててカメラを入れるほうがよく、いっぽう、腹板裏の情報を判読するためには、琵琶を横たえておくほうが、カメラと腹板裏との距離が確保できて具合がよい。

(3) X線撮影

X線による撮影を試みた。大きな琵琶をX線で撮影することは必ずしも容易ではないが、X線写真からは外部の観察ではわからない様々な情報が得られる。1枚で全体を撮影することは難しく、大型の琵琶の撮影は3枚ないし4枚に分けて撮影した。また照射時間や楽器の角度などさまざまな条件を考慮に入れる必要がある。

③……………調査結果

調査した22面の琵琶は、前述のように、雅楽琵琶の大型10面、中型6面、小型2面、平家琵琶3面、そして特殊な形態の琵琶1面の5つのグループに分ける。計測の結果は、小稿末の「表3 琵琶総計測表」にまとめて示す。表3の記載順は表1に従い、グループごとに大きいものから順に記入してある。以下では、この分類ごとに調査結果を記述していくことにする。

グループ別に調査結果を記述する前に、全体の計測結果を概観しておく。個体差はあるものの、

各部の大きさは、基本的に琵琶の全長[2]に比例する。胴の長さ[13]と頸の長さ[3] - [13]も全長にほぼ比例する。ただし、頸が全長に占める割合は、大型が21.5%～23.9%なのに対して、中型や平家や小型では22.9～25.6%とやや大きめである。琵琶の最大幅(20*w*)も、基本的に全長に比例するが、白菊、嘯月、小嵐は全長に比して幅が大きい。覆手や撥革の大きさもほぼ全長に比例する。それに対して、反手部位の大きさは、転手を手で握って調弦するため、人間の手の大きさで決まるので、中型や小型でも、それほど小さくはない。また、乗弦、乗竹、柱といった小部分も、全長の値とは比例しない。

A. 大型の雅楽琵琶

全長が90cmを超える大型雅楽琵琶は10面あり、本コレクションのほぼ半数を占める。

大型琵琶のうち、1枚板で槽(甲)が作られている直甲の琵琶が6面、剥甲が4面、うち2枚接ぎが2面、3枚接ぎが2面あった。これらの製作年代は、伝承上は白鳳時代にさかのぼるものから江戸時代のものまで様々で、どの時代にも一貫して大型琵琶が作られ続けていたことがわかる。大きさに規格があるわけではなく、さまざまな大きさのものがあるが、99cm(曲尺で3尺3寸)前後に製作年代の古い4面が集中しており、90～95cmのものは少ない。

以下では、X線写真を撮影することができた白鳳、美女、筑夫島の3面を中心に調査結果を報告する。記述の順番は、原則的に表1に従い、参考に国立歴史民俗博物館の資料番号(H-46)を付す。

1. 白鳳 H-46-92

このコレクションの中では朝陽に次ぐ大型の雅楽琵琶である。計測値は99.1cm(全長[2])×40.8cm(胴幅[20*w*])×7.7cm(胴厚[21*d*])である。重さは、似たようなサイズの朝陽や嘉吉丸にくらべてずっと重く、6.3kgある。

腹板は柁目の3枚接ぎ。接ぎ目の接着剤が表に黒くはみ出ている。腹板の周縁は角が丸くなっており、経年変化を感じさせる。腹板に開けられた半月は幅が広く大きい。

(1) 計測と観察

腹板は0.7cm[21*d*]と薄く、遠山肩の位置では0.6cm[34*d*]とさらに薄くなっている。その上、腹板上端には、長さ3cmほど別材がはめ込まれている(写真4)。修理の際に接着面を平らに削りなおしているうちに腹板が薄くなってしまったことが考えられる。付属文書(92②)によれば、寛政年間に修理をしたとあるが、記録に残らない修理が何回も重ねられたことと思う。

槽は直甲で、鳥根目録によれば材はカリンである[1956:15]。かなり黒ずんでいる。

転手は、「白鳳古転手」という包に2本の転手が保存されていることから、現在の4本は後補のものと考えられるが、これらの長さ[43*w*～46*w*]や太さ[43*d*～46*d*]は、古転手とほとんど変わらない。古い転手が折れたか紛失した際に、同じ大きさのものを揃えて交換したと考えられる。転手を嵌めこむ反手は、ツゲ製と思われるが、すっかり変色して飴色になっている。

柱は頸上のもの、外れているものを合わせると6柱ある。第2柱のみが頸上に接着している。別途「白鳳古柱」という包に柱が3個、また「享和3年」の上書きを持つ包にも1柱が含まれている。

さらに琵琶槽内に一つ柱が落ちていることがX線の写真であきらかになった。柱は比較的外れやすい。琵琶が立てておかれた状態で柱がはずれると、落下して覆手にあたり、槽内に転がり入る可能性が高い。

撥面は、寛政12年(1800)に「尾州御蔵之白菊御琵琶撥面之趣をもつて御好にて住吉内記」(付属文書92⑦)が描いたもので、色鮮やかな緑の桐の葉が一面に描かれ、その上に一羽の鳳凰が大きく翼を広げて舞う姿が配されている(口絵「白鳳」参照)。撥革には、弦の下に筋状に摺れた痕があり、多少弾奏されたものとみられる。

覆手は、明るい茶色で、腹板や槽、頸とは材が異なる。細かな傷がたくさんある。覆手元の右端は、わずかながら材が欠けている。通弦孔周囲には、水牛をはめこみ、象牙で縁取りする雅楽琵琶に典型的な猪目のデザインを持つが、白鳳の猪目はふっくらした輪郭に特徴がある。

磯(琵琶胴の側面)に貼られる落帯という革製の帯は、接着痕からみて、左側の先端が7cmほど欠損している。

撥は、握りの部分の透かし模様の特徴がある。通常はここに猪目を一つ、ないしカタバミ状に三つ組み合わせた模様が透かされるが、この撥は、三つの丸をつないだ重三星紋が透かされている。

(2) 槽内観察

槽内には、半月からCCDカメラを入れたが、観察できた範囲は半月と虹の間の部分に限られた。槽の内側の表面はかなり凹凸が多く、木がやせている印象を受ける。横向きに筋状の不規則な溝が数本彫られていることが確認できる(写真2)。傷のようにも見えるが、これらの溝をなぜ彫ったのかは不明である。



写真2 白鳳 槽内筋状の溝

白鳳の付属文書92⑤「御琵琶槽内書附写 弍枚」は、槽内の虹(腹板裏に接着する渡し)に書かれた文字の写しである(写真3)。これによれば、虹の側面に、中央から端に向けて左右二つの文が記される。歴博図録[2004:369]の翻刻では左側を「此ひわ白鳳六丁ニくゝりつゝ」、右側を「コノクヒワ在田坊之書物ミツクル」とする。島根目録[1956:15]では左右をわけず「白鳳六丁コノヒワ在田坊と云物のツクル」と読んでいる。右側は、「コノクヒワ(この頸は)在田坊と云物之ツクル」とも読めそうである。

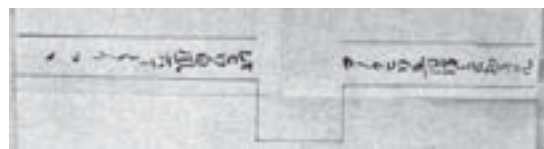


写真3 白鳳 文書92②

白鳳は『集古十種』の「楽器の部」にも「紀伊家琵琶図」として紹介されているが[松平1800年序。翻刻4:443]、ここでは「腹板之裏面白鳳六丁ノ四字ノ及在田坊等ノ文字アリ」と記される。槽内の観察ではこの点を明らかにできたらという期待があったが、観察範囲が限られていたためその点は確認できなかった。しかし、付属文書の読み方によっては、この琵琶の頸が本来のものではなく、槽や腹板とは別の人(在田坊)が作った可能性を指摘できるだろう。

なお、『集古十種』の図中に書き込まれた白鳳の寸法と今回の計測結果の対照を表2に示す。『集古十種』の撥面の長さが現状より長いのは、撥革が経年変化により縮んだためであろう。白鳳を観

察すると、撥面の上下には、撥革をはみ出すように接着痕がみられる。匡口幅も誤差が大きい、こちらの原因は不明である。

(3) X線写真

槽を中心に、4枚に分けてX線写真を撮影した。今それらを並べて、写真4に示す。

まず、頸と胴の接続部分では、頸下端の差し込み部分と胴側の受け口の大きさが異なっていることが分かる。匡口から下にさがるにつれて、頸下端の差し込み部分は細くなっていき、胴側の受け口との間に隙間ができています。また、差し込み部分の長さは、槽の内縁に達する前で終わっており、長さもあっていない。これでは頸が安定しない。腹板上部に貼り付けられた別材はこれを安定させるためのものかもしれない。その別材は、匡口に近い差し込み部分に載せられている。こうした大きさのずれや別材による補強は、槽内虹の墨書にあるように、「コノクヒ」は「在田坊と云物ツク」って、後から組み合わせたために必要になったのかもしれない。

槽内、頸下端のすぐ下にある白い部分は何を意味しているかわからない。槽の外側にも腹板の表にもそれに対応する状況は見いだせず、槽内の形を映しているものかと思われる。

遠山の先端近く、反手よりやや上の部分から撥面上端までの間に、不規則な横筋が6本ほど白く浮き出ている。これが槽内観察でも認められた傷状の溝である。覆手先端位置あたりまで、さらに何本か筋が有るようでもあるが、よく確認できない。何らかの音響的な目的があつたものなのかも不明である。

撥革のほぼ中央あたりに左右に虹が渡してあり、その中央部に支柱が写っている。X線により、虹と支柱の位置と大きさが容易に確認できる。心持ち右側（IV弦側）が低く左側が高い。虹材の幅は1.8cm程度である。

覆手の下の隠月は、ほぼ円形で、横長

表2 『集古十種』の白鳳の寸法

	『集古十種』の寸法	今回の計測値
全長(頸材上まで)	3尺2寸6分(98.8cm)	98.9[3]
撥面長さ	5寸6分(17.0cm)	16.4[18~23]
匡口幅	1寸1分(3.3cm)	3.8[13w]
最大幅	1尺3寸5分半(40.9cm)	40.8[20w]
厚さ(磯)	1寸1分(3.3cm)	3.3[21d]

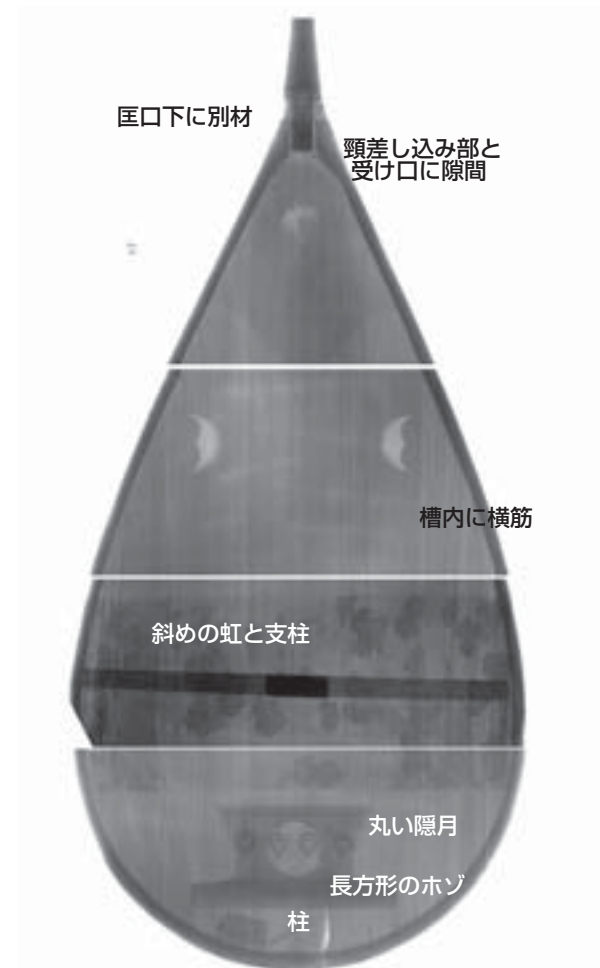


写真4 白鳳 胴のX線写真

楕円形の隠月が多いなかで、やや特殊な印象を受ける。また、覆手の接着面中央に長方形（5×1.5cm程度）の影が見える。腹板と覆手をつなぐホゾかと思われる。

2. 美女 H-46-97

大型の雅楽琵琶である。全長98.6cm[2]×胴幅40.8cm[20w]×胴厚7.9cm[21d]と、白鳳や朝陽、嘉吉丸とよく似たサイズを持っている。重さは、5.3kg。

紀州藩の藩医川村良碩が、異なる来歴の槽と頸を入手し、古材を腹板として組合せ、細かい部品を補って、寛政11年（1799）に三井伊織に修理製作させたものである。付属文書にある槽内の写しによれば、槽は文和2年（1353）の切銘を持ち、仏工政尊が下野美女木の神社に奉納し、後年鎌倉の鶴岡の相承院に伝来したものであり（付属文書92④）、頸は、鶴岡の楽家に「名妓千手」が奏した琵琶として伝来したものである（付属品92⑤）。腹板には古く枯れた木の油を抜いて、古木同然に仕上げたものを使い、製作以後10余年、手入れをして、音色もよくなってきたので、文化9年（1812）に治宝に献上したという（付属文書92⑥）。

(1) 計測と観察

付属文書によれば槽は、紫藤香（97①）である。槽の下端と左端（第IV弦側）は、表面が剥落したように削れている。

腹板は通常、クリなどの材を3枚接ぎにするが、この琵琶は5枚接ぎになっている。多分、修理の際に、槽に見合う古材で、十分な大きさをもつものがなかったためであろう。接ぎ目とその周囲は変色しており、写真でもはっきり確認できる（写真5）。

撥面には、紫皮朽木隠画（飯塚図貞筆）が描かれる。弦の下に筋がついており、また撥で弾ずる位置に、弦と直角方向に撥革がすれている。川村も音色に言及しており（付属文書97⑥）、治宝も試し弾きをするなどして音色を確かめている（付属文書97⑤）。実際によく用いられた楽器であろう。撥革の上側の腹板にも、弦の筋がくっきりと4本残っている。



写真5 五枚接ぎ・弹奏痕

反手はツゲと思われるが、濃い茶色に変色している。転手はコクタン風の色である。乗弦も似たような色をしている。側面から見ると、乗弦は上端でかなりr(アール)をとって丸く仕上げている。

弦ははずれているので、乗竹もよく観察できる。弦の当たる位置に糸道が付いている。頸はやや明るい茶色の材で、4柱はすべて欠損、接着痕のみが認められる。第1柱の接着痕の上には、隣接して古い接着痕とみられる傷がある。

覆手の猪の目は、水牛の角を象嵌し象牙で縁取りを施した標準的な形をしている。

(2) 槽内観察

付属文書97④【槽内写】によれば、槽内には墨書が6行と切字が3行書かれているはずだが、表面が黒ずんでおり、また細かなゴミがたくさんあって、墨書は読むことができない。中央の切字による梵字5文字のうち、4、5字目が確認できたが（写真6）、上下に続く部分の判読は難しい。腹板は、槽にくらべてずっと材の表面はきれいで、虹の下に「明治十五年七月／加修覆之／楽工神田

吉道」という墨書が認められた(写真7)。付属文書97④【槽内写】では「明治十五年七月修覆加／神田吉道」となっており、少し文句に出入りがある。槽の底面と腹板の裏面は比較的なめらかだが、



写真6 槽内切字



写真7 腹板裏墨書

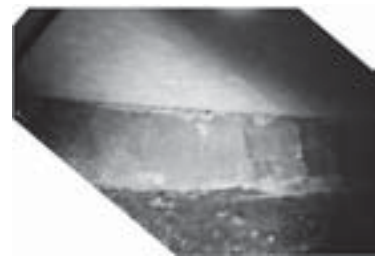


写真8 槽内の様子
腹板裏面、槽側面、槽底面が見えている。
側面には大きなノミ目が見られる。

槽の側面にやや深めの大きなノミ目が見られる(写真8)。

(3) X線写真

X線写真によると(写真9)、やや不鮮明だが、左右2ヶ所に覆手を固定するための円柱状のホゾが確認できる。虹は1.5cm弱の幅で、ほぼ水平にわたされ、中央に5~6cmほどの長さの支柱が置かれている。

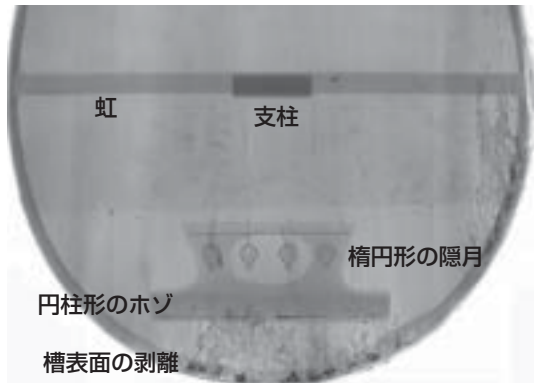


写真9 美女 胴のX線写真

陰月も、白風が円形に近いのに対して、横に長い楕円形(4.0[29-30]×6.2[29w])である。

その点では江戸時代の楽琵琶制作の規準となった『楽家録』に載る「鶏足」の寸法3.33×5.15[安倍1690。翻刻1:261]に近いといえる。しかし、隠月の輪郭が時代と関係あるかどうかは不明である。

3. 筑夫島 H-46-98

これも、大型の雅楽琵琶である。全長95.5cm[2]×胴幅38.8cm[20w]×胴厚6.7cm[21d]、重さは、3.78kgと、大きさの割には軽い。

付属文書98⑧では、住吉内記が撥面の絵は応永年間の藤原寂濟之筆であると鑑定したことを根拠に、琵琶の制作年代も応永年間であろうと推定している。撥面に「虫入」のため、文政12年(1829)に撥面を取り外して修理(付属文書⑧)したという。

(1) 計測と観察

槽(歴博図録:カリン製か)は直甲である。腹板(歴博図録:クリ製か)は柎目の木材の3枚接ぎである。

反手はツゲ製で、型通りの造りだが、弦門には、やや外側への反りが認められる。転手と乗弦はシタン風。乗弦上端は少し面をとってある。頸は、乗弦や転手より、黒っぽい材でコクタン風である。4柱のうち第4柱が欠損しているが、X線写真に写る槽中の木片がこれにあたる可能性が高い。第2柱は第1柱や第3柱と形も木材の色も異なり、後補とみられる。接着痕から見て、かつてはも

う少し上についていたようである。

覆手はシタン風で、やや明るい色の別材を覆手先にあてている。その境には象牙をはめる。通弦孔の縁と猪の目の縁にも象牙を用い、猪の目には、ベッコウを象嵌する。覆手元の接着の仕方を見ると、腹板のほうに少し傷があり、覆手が付けなおされていることが分かる。

撥革には、金雲のたなびく筑夫島の景色が描かれ、手前の湖面には小舟も浮かんでいる。よく見ると覆手よりの撥面に点々と直径1mmほどの虫食いの穴があいている。付属文書にいう「虫食」はこのことか。撥面には、弾奏痕も、弦がすれた痕もなく、撥面が描かれてから、ほとんど演奏されていないのではないかという印象を受ける。

(2) 槽内観察

左の半月からカメラを入れるとすぐの槽に、「時(?)」「奉」「命修」の文字が見える。文書98⑩の藤原能広の修理記録「文政十二己丑歳冬十一月吉日／奉／命修調之 御楽器師田村左司馬／藤原能広 花押」の一部であろう。赤外線仕様のカメラを用いたが、撮影した写真には、あまり鮮明に文字が写らなかった。

槽の内面は、ノミの目が見えない程度に平らに削られているが、側面には凹凸が見られる。その形はX線写真ではっきり確認できる。

(3) X線写真

筑夫島は、X線写真によっていくつか興味ある点があきらかになった。

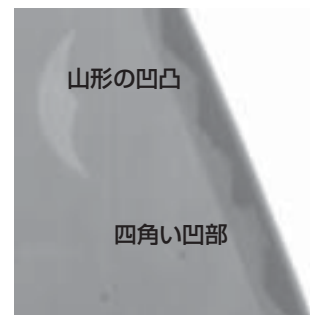
まず、槽内周縁に沿って2cm程度の間隔で見られる小さな山形の凹凸である(写真10, 11)。三味線の胴の内部には、綾杉という彫りが施されているが、それと同様に、なんらかの音響的な効果を目的としたものであろうか。CCDカメラによる槽内観察によっても、この凹凸が確認できた。

次に、X線写真によると、虹と支柱がない。槽内部周縁には、虹がはめ込まれたと思われる凹部が見られるので、かつて虹があったことは確かである。通常、虹は撥

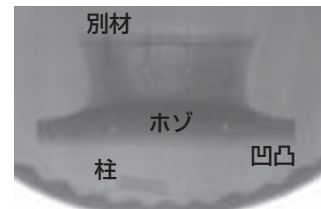
面の中央あたりで左右に渡され、腹板に接着されるが、筑夫島には、その位置に加えて、虹をはめ込むためと思われる凹部が半月の近くにもう一組認められる(写真10, 11)。つまり虹が2本わたされたか、あるいはその位置が変更された可能性がある。周縁の凹凸が三角形なのに、虹端を埋めるくぼみは、四角い。



写真10 筑夫島の胴



半月周辺



覆手周辺

写真11 筑夫島の部分

隠月についても、普通と異なる特徴がある。隠月上端に別材を補って隠月の長さを短くしているのである（写真 11, 12）。つまり円形に近い隠月が横長の形に作り変えられている。その理由は特定できないが、覆手を小さいものに交換したら隠月がはみ出してしまうのでふさいだとか、音色や音量の加減で隠月を小さくしたかったといったことが考えられる。

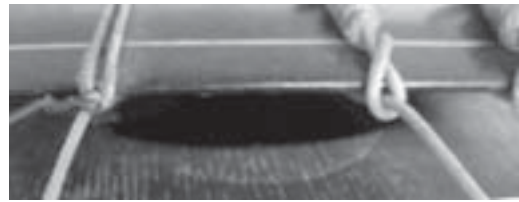


写真12 筑夫島 隠月
手前の縁で、わずかに明るい色の部分が別材である。

X線写真で確認すると、覆手を腹板に固着する際に、白鳳同様ホゾを使っている。ここでは、円柱状のホゾ材が左右に2本確認されるが、さらにその約2cm外側に角柱状のホゾ材も2本みえる。異なる修理の際に用いたものであろう。X線の写真11では、円柱状のホゾが見えている。なお、この琵琶の槽内にも柱が落ちている。

頸と胴（腹板と槽）の接着は、X線写真で見える限り差し込み部の先端に至るまで一分の隙もなく、その長さも槽内側面まで過不足なく達している（写真10）。頸と槽がこのようにきちんと接合されているので、頸が後補でない可能性が高いといえるであろう。

4. その他の大型雅楽琵琶—朝陽, 嘉吉丸, 花園, 白菊, 白神, 嘯月, 箕面

上記3面のほか、全長が90cmを超える大型琵琶は、7面ある。それらについて、目立った特徴を指摘しておく。

①朝陽(H-46-95)は、白鳳、嘉吉丸とならんでこのコレクションの中で最大級の直甲の楽琵琶である。この3面の琵琶の全長は、0.1cmから0.2cm程度の差しかなく、ほぼ同じサイズといってもよい。その中で、朝陽は、全長の割には軽く(4.76kg)、胴の幅[20w]も他と比べてわずかに小さい。また転手も短めである。柱と落帯を除き、すべてが古色を帯びている。半月からのぞくと「化」の字が見えるが、その前後の文字の有無はわからない。

②嘉吉丸(H-46-101)も、大型の直甲琵琶である。名器「青山」を模して造られたという。国立劇場所蔵の「青山」は、かつて紀州徳川家のコレクションに含まれており[歴博図録2004:326]、やはり歴史上の名器青山の摸作ではないかとされている(国立劇場展示会解説)。筆者が2005年調査した国立劇場所蔵の「青山」の計測データと比べてみると、嘉吉丸の計測データと比較的よく似ている。まず、高さ[7]に関しては、全長[2]は、青山が4mm長い、匡口[13]、撥面[18][23]、覆手[24]の位置などの値は、2mm程度と小さく誤差の範囲内と考えられる。目立つ違いとしては青山の月[15]が、嘉吉丸より5mm~7mm高い位置についていることと、覆手元[24]の位置が青山のほうが8mm高いことぐらいである。幅[w]に関しては、左右の半月間の距離[16w]とか反手の弦蔵[42w, 48w]は、青山の方がやや狭いのをたいして、匡口の幅[13w]と覆手元の幅[27w]は、青山が広いが、それ以外の数値は比較的よく似ている。使われている木材の色目や、覆手の通弦孔の装飾の仕方なども似ており、嘉吉丸が、国立劇場現蔵の青山をモデルにしたとしても、あるいは両者に共通のモデルがあったとしてもおかしくない。撥革の傷みなどは、嘉吉丸のほうが激しい。なお、徳川頼貞の家令から田辺尚雄に送られた『紀州徳川侯爵家雅楽書雅楽器目録』には、「青山」

の琵琶はなく、「青山」を模した琵琶として「朝風」が記載されていることは前述のとおりである（本稿註1）。

③**花園(H-46-99)**は、『体源抄』の名器の部にも載り、「花利木、唐花鳥クジャク」と記される〔豊原統秋1512、翻刻3:826〕。また『承久二年御琵琶合』にも名が挙がる〔後鳥羽天皇1220、翻刻287〕。直甲が多い本コレクションの大型の琵琶の中では箕面とならんで3枚の接ぎ甲を持つ。胴の厚みがこのコレクションの中では最大である。覆手はほぼ中央に朱漆

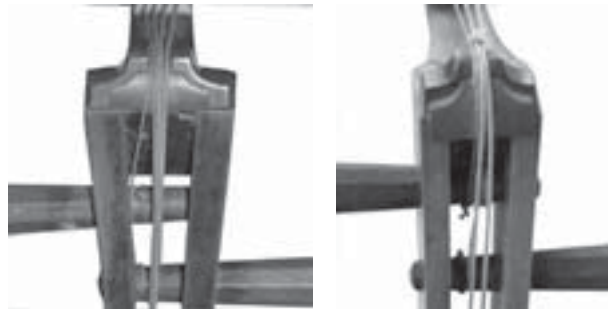


写真13 乗竹・乗弦(左:花園, 右:箕面)

の修理痕がある。乗竹[52]-[48]が短いため、弦蔵の上にかからず、乗弦の上のみに乗っている。比較のために、標準的な乗竹の形を持つ箕面の乗竹・乗弦部分と並べて示す（写真13）。花園の乗竹は短く、弦蔵内部の頸材が反手先端まで到達している構造が見えている。

また、乗弦上端は、箕面が曲線的なのに対して、花園は角ばっている。

転手[43w]は14.4cmあり、白菊や箕面と並んで長めである。頸材と同色の塗りが、腹板上端0.2cmほどに施されており、実際より下に匡口があるように見える。右半月からのぞくと、槽内に墨書らしいものが見えるが、判断としない。弦の下にあたる撥面はかなり擦り減っており、よく弾奏されたものと思われる。覆手先[24d]が1.6cmと、他の大型琵琶より少しだけ高い。半月の位置がやや高く、その結果半月間の距離が小さい。左側磯で、腹板がすこし槽から浮いて隙間ができています。



写真14 白菊 右側の磯 別材を挟む

④**白菊(H-46-113)**は、島根目録によると、文化14年(1817)三井伊織真吉作〔1956:20〕。このコレクション

の中では最も新しい作である。藤原師長の伝承を持つ尾張徳川家蔵の琵琶「白菊」を模して造られたという。胴の磯は4cmとやや厚めで、そのうち1.8cmほどは槽と似た木質の別材を槽と腹板の間に、縁に沿ってはめてある（写真14）。つまり槽の周縁に別材をあてて槽を深くする作りとなっている。槽は2枚接ぎである。また腹板のふくらみは0.65cmと小さく、腹板表面が平らな印象を与える。このほか、転手が長い、乗弦の溝(弦道)に象牙を象嵌している、などの点が指摘される。



写真15 嘯月 撥面の銀月

⑤**白神(H-46-108)**は、大型の雅楽琵琶のなかでは、少し小さい〔2〕94.3cm)。白神は、全長に比べて、反手や覆手が大きめにできている。特に覆手元の幅[27w]が大きく、また、覆手の下

にある隠月の幅[28w]も大きい。乗弦の高さも[5d]も1.9cmと高い。

⑥嘯月(H-46-106)は直甲の楽琵琶だが、平家琵琶のように撥面上に銀製の月がある(写真15)。銀製の月が必ずしも平家琵琶固有のものでなかったことの証といえるかもしれない。撥面にはかなりの演奏痕がある。反手裏面、第I弦の転手付近が小さく欠けている。左半月から、槽内に文字らしきものが見えるが、カメラを入れるのには半月が小さいため、槽内観察は行っていない。

⑦箕面(H-46-94)は、大型琵琶の中では一番小さく、各部のサイズはむしろ中型の雅楽琵琶に近い。製作伝承は古く、保延4年(1138)作と槽内に記されているという。槽と腹板の接着面はまっすぐで、腹板がやや厚いことから、腹板は文政2年(1819)の修理時に全面的に新しいものと取り換えられたかもしれない。撥面には秋の箕面の風景が描かれるが、演奏痕はほとんど認められない(写真16)。

撥面の絵を描いた住吉外記が、文政4年に小笠原俊輔に宛てた手紙が附属している(附属文書94①)。送られてきた撥面の絵の下案に対する感想を述べたもので、そのなかで「月ニ鹿ハ随分宜敷奉存候間、其内下絵相認置可申候、右御撥面ニ御金物ハ無御坐候也、若有之候得ハ、月ハ認不申」と記している。鹿と月の取り合わせはとても良いが、撥面には金物は付けず、もし付けるにしても、月は認めないというのである。このことから、撥面に金属製の月を付けることが楽琵琶にはふさわしくないと考えられていたことが察せられる。ふさわしくない理由としては、後述のように、金属製の月が平家琵琶の装飾として定着していたからと考えられないだろうか。



写真16 箕面 撥面の月

B. 中型の雅楽琵琶とその構造

琵琶の全長が80cmから90cmのものを便宜的に中型として一つのグループで扱う。このサイズの雅楽琵琶は、現在はほとんど作られなくなっているが、この楽器コレクションには、6面が含まれ、平家琵琶のうち80cmを超える2面も含めれば、この大きさの琵琶は8面と、ほぼ大型の雅楽琵琶10面に近い面数が含まれることになる。歴史的には、中型の琵琶もかなりの数が作られ、用いられていたと考えてよいであろう。ただし伝説的な起源伝承を持つ小嵐と文殊丸以外は、近世期の作である。なお、このコレクションでは全長が88cm(2尺9寸)以上の中型雅楽琵琶はなく、87cm前後に3面、83cm強に4面が集中している。

平家琵琶には、この大きさのものが多く、このグループの琵琶と比較することで、その特徴が明らかになることが期待される。

以下では、まず、解体している雲鶴を例に、中型琵琶の各部の形を観察し、琵琶の構造について述べる。次に、継ぎ琵琶の例として小嵐をとりあげ、さらに雲上の槽内観察結果について記す。

1. 雲鶴(H-46-103)に見る琵琶の構造

槽は3枚接ぎで、内側(槽内)に製作情報と修理情報が記されている(写真17)。槽の接ぎ目が

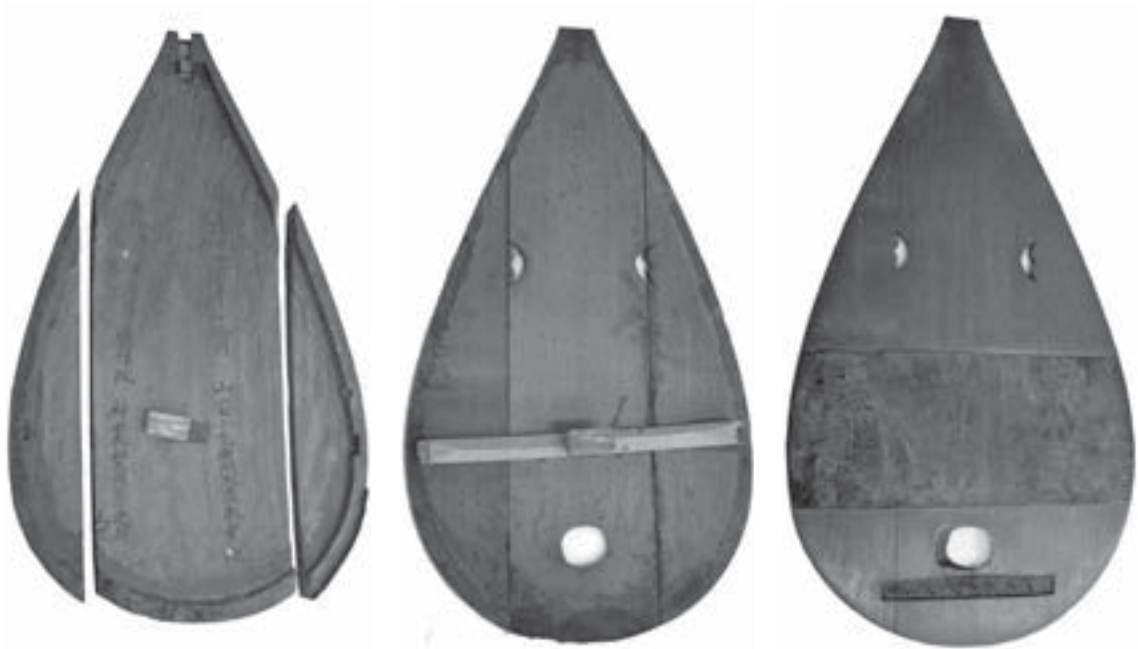


写真17 雲鶴 槽内(墨書あり)

写真18 雲鶴 腹板裏面

写真19 雲鶴 腹板表面

外れている。槽内は比較的なめらかに削られており、槽中央に虹を支える支柱の接着痕がある。写真17では修理の際に支柱の長さが足りず補ったと思われる材が接着痕の上に置いてある。その左右の槽縁には、支柱とほぼ同じ幅の凹部が見られ、ここに虹(渡し)の両端をはめる。槽縁の凹部の少し上に、やはり左右に虹用の凹みの半分ほどの大きさの凹みが見られる。しかしこの位置には虹用の支柱を置いた痕は見いだせないし、腹板側にも虹を接着した痕がなく、この凹みの用途は不明である。大型琵琶の筑夫島(H-46-98)にも、凹みが2対有ったことと考え合わせて考えるべきであろう。

槽周縁の腹板との接着面は、上部に行くほど幅が狭くなっている。白鳳のX線写真でもこの特徴が見られた。また接ぎの外れた部分で槽の削り方を見ると、下方では槽の厚みが1.9cmと厚く、上へ行くと1.6cmとやや薄くなっている。『八音抄』では、「甲の厚きは無下ならん定六七分にはおとましおほ様はよろしからん」[藤原1216以後、翻刻293]と、1.8~2.1cm程度の厚さだと、音量が増してよいとしている。雲鶴の槽はその意味ではやや薄いだが、この琵琶が中型であることを考えれば、妥当な厚みと思われる。槽上端には、頸先端の突起をはめ込むためのくぼみが設けられている。

腹板も3枚接ぎである(写真18)。腹板の裏側に墨書はないが、虹と支柱が付着している。現状では、虹の両端が接着がはがれて少し浮いている。撥を覆手の下の隠月に差し込んで収納するために隠月の縁は斜めに切られている(写真18, 19)。半月孔も縁は薄く、周囲に向かって厚みを増すように斜めに切られているので、裏面の半月(写真18)のほうが表面の半月(写真19)より大きく見える。虹は白鳳同様心持ち傾いている。

隠月の下には、覆手接着面に合わせて0.1cm程度の深さの彫り込みがあり(写真19)、ここに覆手元をはめ込んで接着する。接着剤が馴染むように、彫り込み部分には斜めに筋状の切り目が付け



写真20 雲鶴 覆手表

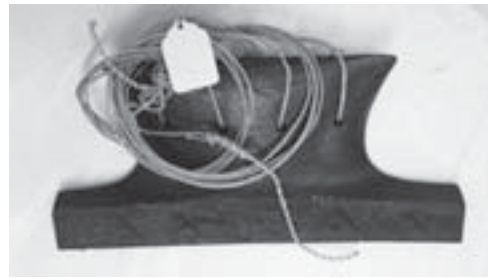


写真21 雲鶴 覆手表裏

られている。X線で観察した白鳳や美女、筑夫島の覆手ではホゾを用いていたのに対して、雲鶴はホゾがない。

覆手は、隠月を覆うように腹板上に接着するのでこの名がある(写真20)。弦を結び付ける先端は0.1cm程度に薄くなっているが、元へ向けて覆手の裏面は膨らんでおり、かなりの厚みをもっている(写真21)。弦の張力に耐えるだけの強度が必要だからであろう。いっぽう、この膨らみが大きすぎて隠月をふさいでしまうと、共鳴孔としての役割を損じることにもなる。なお、この膨らみのために、隠月からは槽内観察用のカメラを入れられないこともある。

覆手の裏側の接着部分も切り目を付けて接着しやすくしている(写真21)。

頸は、下端に3.6cmの長さの差込部を持ち(写真22)、この部分を槽のくぼみに嵌めて上から腹板を貼って固定する。腹板は、槽より6mm長く作られているので、琵琶の正面と背面とでは匡口の位置がずれる。頸正面には、柱の接着痕が4つ認められる。

頸正面を見ると、先端から4cmのところ左右に突起がある(写真22右)。頸上端を左右からはさみこむようにして反手を頸に接着する際に、反手の下端がこの突起に収まる。突起によって、反手が下にずれることを

防ぎ、また頸と反手の接合面がなめらかに連続する。頸材側面での反手との接合部分では、頸の材が太くなっていて、三角形の接着面が確保されている。この部分は琵琶の背後から見ると猿の短い尻尾のようなかたちをしていることから、猿尾と呼ばれている。三角形の接着面の中央には、四角いホゾが見られる(写真22側面上)。また、頸正面上端には1.3cmの長さ



写真22 雲鶴 頸側面・正面



写真23 雲鶴 反手表・裏



写真24 雲鶴 転手

で乗弦の接着部がわずかに彫り込んであり、ここにも、ホゾを用いた穴が認められる（写真22正面上）。乗弦の上で、4本の弦がほぼ直角に向きを変えることから、この部分には大きな力がかかる。ホゾはその力を支えるための工夫であろう。

反手は、転手（糸巻）を挿し込む弦蔵の両側の材である弦門と、先端の海老尾の部分からなる。弦門の下面は、弦蔵に向かって厚みを増すように傾斜している。

転手は、八角垂に削り、反手に差し込む側3.0cmほどは角を取って円柱状にする（写真23）。手で握る側の端から1.5cmほどのところで一番太く、そこから端に向けて逆八角垂に細くして、先端は小さく面を取る。なお、雲鶴の転手のうち、第Ⅰ弦用と第Ⅱ弦用の転手には、弦を通す孔が二つあいている（写真24）。傷んだ先端を落として手前に孔をあけなおしたものであろうか。

2. 小嵐(H-46-96):継ぎ琵琶

「竹林の七賢人」の一人、阮咸の墓中からでたという伝承を持つ小嵐は、継ぎ琵琶である。もちろん、阮咸の生きた紀元前3世紀に雅楽琵琶の祖となった四弦曲頸琵琶はまだ中国に伝わっていない。継ぎ琵琶とは、胴から頸を抜いて分解できる琵琶のことをいう。『方丈記』には、鴨長明が簡素な方丈に「折琴継琵琶」を置いていたと記されている〔鴨1212, 翻刻1957:37〕。雲鶴でみたように、琵琶の頸は、槽側の受け口に嵌めこんで接続する構造になっている。弦を張ればその張力で頸が固定される。小嵐には、頸を胴から抜いたときに、それぞれ頸の先と胴側の受け口を保護する木製の鞘が付属している（写真25, 26）。



写真25 小嵐 胴の鞘



写真26 小嵐 頸の鞘

3. 雲上 (H-46-105)の槽内

雲上は、CCDカメラにより槽内の墨書が読みとれた（写真27）。腹板の裏に「天女神」「三井伊織」「文化三年正月」の文字が、槽側に「文化三年」の文字が認められた。この琵琶には付属文書がなく、鳥根目録には、田村能広が文政10年（1827）に修理したとある〔1956:19〕。槽内の墨書によれば、それ以前の文化3年（1806）に三井伊織が修理していたことになる。なお、雲上の槽内には、虹が認められなかった。この点では筑夫鳥とならんで例外的な作りである。

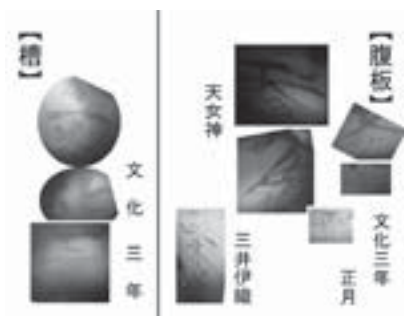


写真27 雲上 槽内墨書

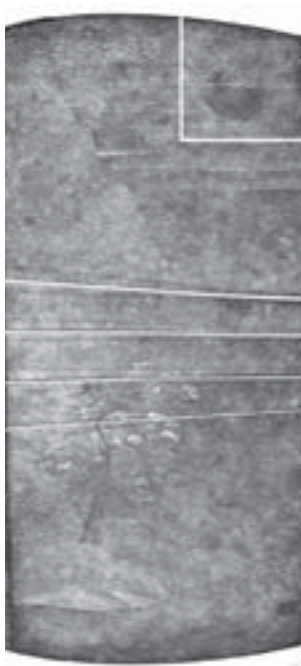


写真28 鶴吟 撥面月痕



写真29 武蔵野 撥面月痕？

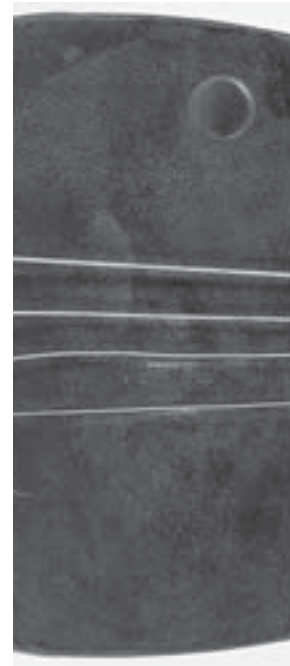


写真30 文殊丸 撥面月

C. 平家琵琶の特徴

従来、平家琵琶の特徴としては、雅楽琵琶よりやや小さく、撥面に月の装飾があり、雅楽琵琶は4柱であるのに対して平家琵琶は第5柱をもち、撥先の両端がとがった撥を用いるという五つの点が指摘されてきた。また郡司は、平家琵琶は柱が高いことを指摘している〔郡司 2006:310〕。本コレクションの琵琶には、第5柱をもつ琵琶はないが、第5柱を接着した痕を持つ琵琶が3面ある。鶴吟 (H-46-104)、武蔵野 (H-46-107)、文殊丸 (H-46-100) である。第5柱は雅楽琵琶では用いないことから、これらは少なくともかつて平家琵琶として用いられたことが明らかである。そこで、この3面の琵琶が、上記の平家琵琶の諸特徴をどの程度持っているかを観察することによって、平家琵琶の特徴について再検討したい。

3面のうち、鶴吟は、紀州藩医川村良碩が紀州家に納めるときに、「槽を放って」雅楽琵琶に直したと記されており (付属文書 104 ⑧)、他の2面も、雅楽琵琶として用いることを目的としてコレクションに加えられた可能性がある。その理由は、このコレクションには、平家琵琶用の撥が一つも含まれないからであり⁽⁸⁾、また、平家の演奏に必要な第5柱はすべてこの3面では外れているからである。そうした点も考慮に入れつつ考察を進める。

これら3面の琵琶は、どれも何らかの形で平家琵琶奏者との接点を持つ。鶴吟は川村の実父津川検校 (利文一) の所持品であった (付属文書 104 ⑧)。検校は当道座の琵琶法師 (盲人音楽家) の官位である。当道座の音楽家は、平家琵琶は演奏するが雅楽琵琶は演奏しない。文殊丸についても、付属文書にかつて「都下瞽師中野某家」にあった旨記されるが (付属文書 100 ⑥)、「瞽師中野」と

は、京都の波多野流の平家奏者中野檢校⁽⁹⁾のことであろう。武蔵野は、鳥根目録によると、「小堀遠州御部屋様御蔵差上」とある〔1956：19〕。小堀遠州は千利休とともに平家を学んだともいわれている〔館山1910：408〕。

さて、以下で平家琵琶の特徴について検証してみたい。まず、大きさである。平家琵琶は、本コレクションの琵琶も含め、80cmから90cm前後のものがほとんどである。大型のものを雅楽琵琶の規準と考えれば、「雅楽琵琶よりやや小さい」という説明は妥当だが、雅楽琵琶に中型のものが相当数あることを考えれば、「中型の雅楽琵琶が平家用にも用いられる」というほうが実態に合っているだろう。

次に撥面に月を持つという点である。明治以降の平家演奏家の使用した琵琶は、いずれも銀製の月の装飾が付いている。月の形は、満月、三日月、半月などがある。いっぽう、中世の琵琶法師の図像には月の確認できるものがない。江戸時代に平家琵琶に月を付ける習慣が確立した可能性もある。

文殊丸の撥面には、銀製の満月が付けられている（写真30）。文殊丸の以前の所蔵者中野檢校は18世紀の前半から半ばにかけて活動した。鶴吟には月は付いていないが、撥面上に接着痕が見える（写真28）。これを仲間から贈られた津川檢校もまた、18世紀の人である。これは川村良碩が雅楽琵琶にして納めた際に剥がされたと考えられる。慶長11年（1609）の槽内墨書を持つ武蔵野については、撥面の隅に金地が円形に浮き出ているように見えるが、これが接着痕かどうかははっきりしない（写真29）。いずれにせよ、文殊丸と鶴吟の例から、平家琵琶に月の装飾を付けることは、江戸時代中期には行われていたと考えてよいだろう。

いっぽう、本コレクションの雅楽琵琶には銀製の月の装飾を持つものがある。大型の嘯月（H-46-106）である（写真15）。嘯月については、平家との接点が見いだせないし、また月の位置も他の平家琵琶と異なり、撥面の左側についている。これは単なる装飾だったのであろう。中型の野路（H-46-109）には、月の接着痕が認められる⁽¹⁰⁾。野路は川村良碩の献上品なので〔鳥根目録1956：19〕、平家琵琶であった可能性はある。前述のように箕面の撥面の図案について、住吉外記は文政4年（1821）の手紙の中で、雅楽琵琶の撥面には金物の月は付けないと言っているから（付属文書94①）、この頃には、平家琵琶以外には銀製の月は付けなくなっていたかと思われる。

このほか、撥面の図中に月を含むものとしては、箕面（写真16）、雲上、花月、満月、白神があるが、これらは画中に描き込まれているもので、銀製の装飾とは性格を異にする。

3番目に、平家の柱の高さについて3面の琵琶を調べてみる。鶴吟は第1、5柱が、武蔵野は、第1、2、5柱が、文殊丸はすべての柱が欠損している。また比較の対象とすべき中型の雅楽琵琶も、ほとんどの柱が欠損していて比較に不便である。そこで、柱の近くで弦の上端を支える乗弦の高さ〔5d〕に注目する。柱が高ければ、当然乗弦も高くなるからである。

鶴吟の乗弦の高さは1.7cm、文殊丸は1.8cmで、これらの数値は、中型の雅楽琵琶と同じような値だが、武蔵野だけは2.3cmと突出して高い。京都の江戸時代最後の職檢校（当道座の統括者）であった奥村檢校が所持していた、相応と千鳥の2面の平家琵琶の乗弦は2.0cm以上あるし、名古屋の伝承者たちの使っていた平家琵琶も乗弦は高い。しかし、鶴吟や文殊丸の乗弦の高さ1.7cm～1.8cmは、中型の雅楽琵琶とも共通するものである。概して、大型より中型の雅楽琵琶の方が乗弦

は高めである。中型の雅楽琵琶と比較する限り、かならずしも平家琵琶の乗弦が雅楽琵琶のそれより高いとは言えないのではないだろうか。高い乗弦を平家琵琶の特徴であるとするためには、もう少し例を集める必要があるだろう。

平家琵琶についての考察の最後に、やや特殊な形を持つ武蔵野の乗弦と乗竹を、鶴吟の乗竹と比較しておく。

写真31は武蔵野の乗弦と乗竹である。左側が乗弦の上面と下面である。背が高く、先端がやや広がり気味に鋭角をなしているのが独特である。右側は乗竹の裏と表である。上段左の乗弦上面と上段右の乗竹下面を貼り合わせて使用する。接着面は糊がよく付くように筋が付けられている。下段右は乗竹上面で、ここには弦が当たって糸道ができています。写真32は、標準的な形を持つ鶴吟の乗弦と乗竹部分である。武蔵野の乗弦に比べ背も低く、乗弦先端は広がっていない。

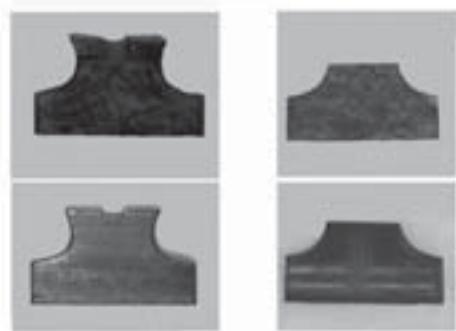


写真31 左上は武蔵野の乗弦の上面、左下は下面。右上は乗竹の下面、右下は上面



写真32 鶴吟 乗弦と乗竹

後述のように、平家琵琶の撥は、雅楽琵琶の撥先両端を尖らしたような形をしている（写真39）。これは雅楽琵琶の撥の古い形を残したものと考えられる。現行の雅楽琵琶の撥は、両端が丸く、しゃもじのような輪郭を持つ（口絵「雅楽琵琶の撥3点」参照）。本コレクションの3面の平家琵琶の内、撥が付随しているのは、鶴吟だけで、しかもその撥は雅楽琵琶の撥である。

以上、平家琵琶の特徴について、第5柱接着痕のある琵琶によって考察したが、中型雅楽琵琶と平家琵琶の違いは、月や第5柱、あるいは撥と言った付属品にとどまり、両者は基本的に同じ楽器であり、形態上から区別することはできないといえる。筆者は、近代に流行した薩摩琵琶と筑前琵琶から区別して、これらを「古典琵琶」と総称している [薦田2004a: 20]。

D. 小型の雅楽琵琶

本コレクションには、全長が80cm未満の小型の雅楽琵琶が2面含まれる。こうした小型の琵琶について、「婦人用や舟や車の内での演奏用であった小型の琵琶を「小琵琶」といい、その銘器もある」[日本音楽大事典 p.294] というような説明もなされているが、琵琶の伝書の類では、「小琵琶」は特定の琵琶の銘であって、⁽¹⁾小型の琵琶を総称する用法は見いだせていない。

小白菊 (H-46-93) は78.5cm[2]。治宝が入手した際に、すでに「古物」であって、神田大和介吉

郎衛門も「七百年より已来之器物」と鑑定し、「小絃ニ而有之候へ共音色ハ大絃之音味有之」と評している（付属文書93⑥）。音色が良かったためだろうか、撥革にはかなりの弾奏痕が見られる（写真34）。



写真33 半月の補修



写真34 撥面の弾奏痕



写真35 反手先の木釘

全体に古色を帯びている。

転手は後補である（付属文書93⑥）。腹板は、めずらしく2枚接ぎである。半月の突起周辺が別材で補修されている（写真33）。反手と頸の接合部には、木釘がたくさん使われている（写真35）。

花月（H-46-112）は17世紀後半の作という。槽内に「一尾通尚」と銘があるという（付属文書112②③）。一尾伊織は、「名を通尚、通徹斎と号し、また一庵と号す。一尾淡路守通春二男。禄千二百石。茶道を細川忠興侯に学び、一流を起こす」という〔館山1910:547〕。全長は76.1cm[2]と、小白菊より少し小さいが、各部の大きさは比較的良好に似ている。

E. 特殊な琵琶

本コレクションには特殊な琵琶が一面、特殊な撥が一枚含まれる。

小車（H-46-110）は、基本的には小型の雅楽琵琶で、付属する撥も典型的な雅楽琵琶用の撥である。大きさは、小型琵琶の仲間よりさらに一回り小さい。全長62.7cm[2]で、胴幅23.8cm[20w]、胴厚は5.3cm[21d]である。重さは1.0kgと、これも小型雅楽琵琶の半分しかない。このコレクションの琵琶のなかでは最小のものである。

小車を特殊な琵琶と判断したのは、その大きさだけでなく、一見して槽や腹板や覆手の木材が通常の雅楽琵琶や平家琵琶と異なって質素なものだからである（写真36）。腹板には普通クリなど



写真36 小車 腹板・撥面・覆手



写真37 小車 逆台形の柱



写真38 薩摩琵琶の柱
(筆者蔵)

の柀目の材を3枚接いで用いるが、これは板目の1枚板を用いている。覆手の通弦孔周囲にも滴形の装飾がなく、孔の周りに円形の環（象牙か）がはめられているだけである。さらに、覆手先端に竹を用いている。頸の長さに対して胴の長さが短く、全体の輪郭も、通常の楽琵琶とは異なっている。撥面にも弹奏痕はなく、演奏用というよりは、模造品かもしれない。

小車が、雅楽琵琶と決定的に異なっているのは柱である（写真37）。4柱が薩摩琵琶（薩摩地方の盲僧琵琶から誕生）の柱のような逆台形をしている。薩摩琵琶の柱とすれば高さが第1柱でも1.0cm[8d]しかなく低すぎるのだが、逆台形の形は薩摩琵琶以外には見られない特徴である（写真38）。柱の位置も薩摩琵琶風に第1柱だけ離れて付けられている。薩摩琵琶の最盛期（明治末から昭和初期）の琵琶職人が、雅楽琵琶の形を知らないまま、欠損している柱を薩摩琵琶風に補った可能性が考えられる。また、小車の乗弦もいちおう雅楽琵琶の形にはなっているが、肩の部分の高さが低く、やや特殊な印象を受ける。⁽¹²⁾この琵琶には付属文書がなく、伝来の事情も不明である。

薩摩琵琶と関連のある品物がもう1点、紀州徳川家のコレクションには含まれる。朱漆塗の琵琶の撥（H-46-155）[歴博図録：287]である（写真40）。「平家琵琶」と上書きされた桐箱に収納されているが、撥の形は、平家琵琶の撥（写真39）と異なり、薩摩地方の古い盲僧琵琶（＝薩摩琵琶の古形）の撥と同じである（写真41）。桐箱の蓋表に「有田郡奥村百姓定右衛門所持の品天保十一年三月差上」と記される。藩の名前が記されていないのは、紀州藩内の地名だからであろう。なぜそのような所に薩摩地方の琵琶の撥があったのかは不明だが、江戸中期の儒者で医師の橋南溪の随筆『北窓瑣談』には、池田甚兵衛という薩摩琵琶の名人が京都に出て、南溪のもとに寄宿し、琵琶を作って贈ったことが見える[橋 1829, 再録：302]。また、天保のころには、薩摩の武士の間で薩摩琵琶が流行していたので、江戸と国元を往還する薩摩武士によって運ばれた可能性もある。いずれにせよ、この撥の存在によって、薩摩地方の同形の琵琶の撥が、天保年間にはできあがっていたことが証明されたといえる。



写真39 平家琵琶の撥
(筆者蔵)



写真40 朱塗「平家琵琶撥」H-46-155



写真41 薩摩盲僧琵琶の撥
(日南市長久寺蔵)

おわりに

以上、本コレクション所蔵琵琶22面について、計測と観察、X線、槽内カメラによる観察の結

果を記した。それらを通して得られたおもな成果を以下に示しておく。

1. 中型の雅楽琵琶の多さ

22面のうち、平家琵琶も含めれば、中型の琵琶は8面に上る。大型琵琶10面に匹敵する数である。『楽家録』に大型琵琶の寸法が紹介され、また、正倉院の琵琶をはじめ、名器として伝わる琵琶の多くが大型であることから、大型の雅楽琵琶が正式の形と考えられていたといえようが、本コレクションの中型琵琶の数は、実際の演奏の場では、中型の琵琶もよく用いられていたことを示していると思う。また、従来の雅楽琵琶の記述においては、中型の琵琶も80cm未満の小さい琵琶も、一緒にされることが多かったが、小型の琵琶は数も少なく、中型とは別に考えるべきであろう。

2. 琵琶の構造

解体している雲鶴(H-46-103)によって琵琶の基本的な構造を観察することができ、他の琵琶の槽内観察やX線写真の読み取りに役立てることができた。

3. 平家琵琶と雅楽琵琶の相違

平家琵琶として使われたことが5柱の接着痕からあきらかな3面の琵琶によって、平家琵琶と雅楽琵琶の違いを観察した。その結果、大きさについては雅楽の中型琵琶と違いはなく、その相違は、撥面の月装飾、柱の数、柱・乗弦の高さといった付属的な部分にあることがはっきりした。文書類や撥の形から、これらの平家琵琶は、雅楽琵琶として利用するためにこのコレクションに加えられたと考えられる。両者は基本的には同じ楽器であり、そのためにこうした転用も可能であることが判明した。

4. その他

そのほか、細部の製作上の工夫や修理の仕方など、多くのことが観察から明らかになった。また薩摩琵琶の撥によって、近代に流行した薩摩琵琶の楽器史の一面が明らかになった。

本論では十分に考察しきれなかったが、本調査の計測結果は様々な活用方法があると思う。また、槽内観察やX線撮影の有効性も確認されたことにより、今後の楽器調査の方向も示せたと思う。

註

(1)——なお、かつて紀州徳川家に伝来したと思われる琵琶に、国立劇場が所蔵する「青山」[水野2004:326]、国立劇場所蔵「田辺尚雄・秀雄音楽資料」に含まれる『紀州徳川侯爵家雅楽書雅楽器目録』に記載される「実性丸」、「朝風」、「秋ノ野」、「浜霧」、「神垣」がある[紀州徳川侯爵家1956以前:楽器目録1-6]。「朝風」は「青山」を模したと同目録に記載されているので、国立劇場の「青山」が目録の「朝風」かもしれない。

(2)——2.9尺から3尺(87.9~90.9cm)の大きさの雅楽琵琶はなく、ここで大型と中型が分けられる。また、2.7尺から2.8尺(81.8~84.8cm)の大きさの雅楽琵琶が多く、それ以下の雅楽琵琶の例は数が少なくなるので、80cmと90cmを目安に大中小に分けることは妥当であろう。

(3)——本来は材木を接ぎ合わせて甲を作るのであるから、「接ぎ甲」であろうが、『楽家録』に「剥甲」とあり、それに倣う楽書が多いので、ここでも「剥甲」とするが、「○枚接ぎ」のようなときには「接」を用いる。

(4)——島根県博物館建設促進委員会編 1956『元紀州徳川家所蔵雅楽器目録』。本文中では「島根目録」と略す。

(5)——国立歴史民俗博物館編 2004『紀州徳川家伝来楽器コレクション』。以下「歴博図録」と略す。

(6)——[五味1975:36]、[高桑2004:78]、[成瀬他2005:97]などに例がある。

(7)——紀州徳川家伝来楽器の付属文書は、歴博図録に翻刻で紹介されている[国立歴史民俗博物館2004:339-405]。

(8)——H-46-155に「平家琵琶撥」があるが、これは

- 形状から見て薩摩（盲僧）琵琶の撥である（後述）。 [藤原孝道 1216 以後、翻刻 291]、『糸竹口伝』[俊鏡
(9)——中野検校は、18 世紀半ばに京都で活躍した検 1327, 翻刻 246]、『順徳院御琵琶合』[後鳥羽天皇 1220,
校で、波多野流の平家奏者。桜町上皇の御前演奏もつと 翻刻 291]、『夜鶴庭訓抄』[藤原伊長? 平安後期, 翻刻
めている [館山 1910: 281]。 210] など。
- (10)——このために、2003 年に筆者の行った歴博の琵琶 (12)——薩摩琵琶形の柱の例としては、武蔵野音楽大学
の調査報告書 [薦田 2004a: 28] では、野路も平家琵琶 蔵の平家琵琶「うたたね」付属の柱がある。しかしこれ
に分類した。 らは、柱の欠損した琵琶に付属品として一緒に納められ
たものである。修理補修の際の後補の品と考えられる。
- (11)——『胡琴教録』[中原有安?, 翻刻 145]、『八音抄]

引用文献（翻刻情報は、本論文執筆のために参照した版のみ記す）

- 安倍季尚 1690 『楽家録』。『覆刻 日本古典全集』（2006 オンデマンド版）に翻刻覆刻。
- 嶋 長明 1212 『方丈記』。『日本古典文学大系 30』（1957 東京：岩波書店）に翻刻。
- 紀州徳川侯爵家 1956 以前 『紀州徳川侯爵家雅楽書雅楽器目録』タイプ印刷の和装本。国立劇場所蔵「田辺尚雄・秀雄 音楽
資料」の内。
- 郡司すみ 2006 『日本伝統楽器小辞典』東京：エイデル研究所
- 国立歴史民俗博物館編 2004 『紀州徳川家伝来楽器コレクション』（国立歴史民俗博物館資料図録 3）。文中では「歴博図録」
と略す。
- 後鳥羽天皇 1220 『順徳院御琵琶合』。『群書類従第十九輯』287-291（1987 統群書類従完成会）に翻刻。
- 五味美里 1975 「新収蔵品解説 平家琵琶「小孔雀」」『東京芸術大学芸術資料館年報 '75』。
- 薦田治子 2004a 「琵琶の部」『古楽器の形態と音色に関する総合研究』平成 13,14,15 年度科学研究費補助金研究成果報告書（研
究代表者高桑いづみ）。
- 薦田治子 2004b 『武蔵野音楽大学楽器博物館研究報告 IX 琵琶』武蔵野音楽大学。
- 斎藤 望 1988 「資料紹介 井伊家伝来楽器の在銘資料（上）」『彦根城博物館研究紀要』第 1 号。
- 斎藤 望 2002 「資料紹介 井伊家伝来楽器の在銘資料（中）」『彦根城博物館研究紀要』第 13 号。
- 斎藤 望 2009 「資料紹介 井伊家伝来楽器の在銘資料（下）」『彦根城博物館研究紀要』第 20 号。
- 鳥根県博物館建設促進委員会 1956 『元紀州徳川家所蔵雅楽器目録』鳥根県博物館建設促進委員会。本文中では「鳥根目録」
と略す。
- 鳥根目録 [鳥根県博物館建設促進委員会 1956] 参照。
- 俊鏡 1327 『糸竹口伝』。翻刻は『群書類従第十九輯』242-256（1987 統群書類従完成会）。翻刻 246。
- 高桑いづみ 2004 「古楽器の形態と音色に関する総合研究」平成 13,14,15 年度科学研究費補助金研究成果報告書。
- 橘 南溪 1829 『北窓瑣談』京都：三木太郎右衛門。『日本随筆大成第 2 期 15 卷』（1964 東京：吉川弘文館）に翻刻。
- 館山漸之進 1910 『平家音楽史』東京：木村安重。
- 田辺尚雄・平野健次 1989 「琵琶」『日本音楽大事典』291-295, 東京：平凡社。
- 豊原統秋 1512 『体源抄』。『覆刻日本古典全集 體源鈔 三』（1978 古典全集刊行会）に翻刻。
- 中原有安? 鎌倉前期 『胡琴教録』翻刻は『群書類従第十九輯』90-151（1987 統群書類従完成会）。
- 成瀬正和・西川明彦・山片唯華子 2005 「2. 北倉 29 螺鈿紫檀五絃琵琶」『正倉院紀要』27 「年次報告」のうち：96-101。
- 藤原伊長 平安後期 『夜鶴庭訓抄』。翻刻は『群書類従第十九輯』205-224（1987 統群書類従完成会）。
- 藤原孝道 1216 以後 『八音抄』。翻刻は『群書類従第十九輯』291-297（1987 統群書類従完成会）。
- 松平楽翁編 1800 序 『集古十種』。翻刻は『集古十種』（1908 東京：国書刊行会）。
- 水野僚子 2004 「紀州徳川家旧蔵楽器コレクションの伝来について」国立歴史民俗博物館編『紀州徳川家伝来楽器コレクション』
323-328。
- 歴博図録 [国立歴史民俗博物館 2004] 参照。

(武蔵野音楽大学音楽学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2010 年 5 月 24 日受付, 2011 年 2 月 21 日審査終了)

表3 琵琶総計測表

部位	位置	計測番号	分類 H-46番号 銘	雅楽(大型)									
				95	92	101	97	99	113	98	108	106	94
				朝陽	白鳳	嘉吉丸	美女	花園	白菊	筑夫島	白神	嘯月	箕面
全長	1	最大高(海老尾先)	99.9	101.2	102.6	98.9	100.9	98.2	100.2	—	97.6	95.2	
	2	全長(乗竹上)	99.2	99.1	99.0	98.6	97.0	96.2	95.5	94.3	93.6	90.4	
反手周辺・頸	3	乗弦上	98.9	98.9	98.5	98.4	96.7	95.9	95.2	93.8	93.2	90.1	
	4	反手材上	98.9	98.9	98.5	98.4	96.7	95.9	95.2	93.8	93.2	88.4	
	5	乗弦下	97.8	97.5	97.4	97.2	95.4	94.4	94.1	92.7	91.8	88.4	
	6	反手下	95.2	95.0	94.7	95.2	92.9	92.2	91.1	90.0	90.8	86.1	
	7	頸最小幅位置	90.2	88.6	90.3	90.0	87.5	86.0	85.0	82.3	84.2	80.9	
	3w	乗弦上幅	4.4	4.2	4.5	4.1	4.6	3.7	4.4	4.1	3.7	3.8	
	3w	乗弦上溝幅	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	0.5	0.6	0.9	0.7	0.7	
	4w	反手上幅	5.0	4.6	4.8	4.5	4.8	4.3	4.7	4.9	4.2	4.1	
	5w	乗弦下溝幅	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.7	7.6	0.9	0.8	0.8	
	6w	反手下頸幅	2.7	2.7	2.7	2.7	2.5	2.8	3.0	2.9	2.7	2.8	
	7w	頸最小幅	2.2	2.2	2.0	2.4	2.2	2.3	2.3	2.0	2.1	2.1	
	5d	乗弦高(溝下)	1.7	1.6	1.4	1.5	1.5	1.3	1.7	1.9	1.1	1.6	
	6d	反手下頸厚	3.5	3.4	3.6	3.4	3.8	3.5	3.2	3.3	3.2	4.4	
	7d	頸厚	2.3	2.0	—	2.1	2.2	2.3	2.2	2.4	2.1	3.2	
	柱	8	第1柱頭下端(痕)	88.7	(88.8)	88.4	(88.2)	86.6	(85.1)	85.0	(84.6)	83.2	79.9
9		第2柱頭下端(痕)	84.6	84.5	83.8	(84.2)	83.0	(81.9)	81.4	(80.6)	79.5	76.5	
10		第3柱頭下端(痕)	80.9	(80.7)	79.9	(80.3)	79.9	(78.0)	77.8	(76.5)	76.2	(72.8)	
11		第4柱頭下端(痕)	77.1	(76.6)	76.5	(76.9)	76.2	(73.9)	74.4	*72.2	(72.7)	69.9	
12		第5柱頭下端(痕)											
8w		第1柱頭幅(痕)	2.0	(2.2)	2.0	(2.4)	2.1	(2.3)	2.0	(2.0)	1.74	2.0	
9w		第2柱頭幅(痕)	2.1	2.4	2.2	(2.5)	2.3	(2.4)	2.0	(2.0)	1.9	2.2	
10w		第3柱頭幅(痕)	2.7	(2.9)	2.6	(2.9)	2.6	(2.7)	2.5	(2.1)	2.2	(2.5)	
11w		第4柱頭幅(痕)	3.2	(3.7)	3.1	(3.5)	3.0	(3.6)	—	2.1	(3.0)	3.0	
12w		第5柱頭幅(痕)											
8d		第1柱頭高	1.3	欠	1.2	欠	1.1	欠	1.2	欠	0.9	1.2	
9d		第2柱頭高	1.0	1.0	1.1	欠	0.8	欠	1.1	欠	0.9	1.0	
10d		第3柱頭高	0.8	欠	1.0	欠	0.6	欠	0.9	欠	0.8	欠	
11d		第4柱頭高	0.8	欠	0.9	欠	0.5	欠	欠	1.36	欠	3.5	
12d		第5柱頭高											
腹板上部(匡口・剥・半月)	13	匡口	76.5	75.7	76.0	76.1	75.8	73.0	73.5	71.3	72.1	68.8	
	14	三枚接上端 左	60.5	62.7	62.3	51.0/70.0	60.0	61.0	54.3	53.8	59.6	50.5	
	14	三枚接上端 右	59.0	62.3	61.3	70.0/52.1	60.6	61.1	54.5	55.0	58.9	54.8	
	15	半月上端	48.0	47.0	47.5	46.4	51.5	47.5	47.3	45.5	46.5	42.2	
	16	半月中央	46.0	45.0	45.3	44.1	48.7	75.1	44.3	42.4	43.8	40.3	
	17	半月下端	43.5	42.7	42.9	41.8	46.3	42.7	42.2	39.7	41.3	38.3	
	13w	匡口全幅	3.8	3.8	3.3	3.7	3.2	3.8	3.7	2.8	3.3	3.1	
	14w	中央板幅	15.0	14.1	15.8	16.3	13.6	13.5	17.9	13.0	14.0	14.3	
	15w	半月上端間	17.5	18.8	19.0	19.0	13.6	16.2	15.9	16.4	15.8	13.6	
	16w	半月中央突起間	17.6	18.1	19.2	18.8	13.4	16.3	16.1	—	14.2	13.2	
	16w	半月中央孔幅(左)	1.5	1.6	1.8	1.7	1.2	1.5	1.6	1.3	1.2	1.3	
	17w	半月下端間	—	18.7	18.8	—	15.2	16.8	16.5	15.6	15.5	—	
	13d	匡口頸厚	3.7	3.2	3.1	3.1	3.3	3.7	3.0	3.4	3.4	3.5	
	13d	匡口腹板厚(左)	0.8	—	—	0.4	0.6	0.7	0.5	0.7	0.5	0.7	
	16d	半月孔深さ(左)	4.3	4.0	3.8	3.7	4.6	4.5	3.7	3.6	4.4	4.8	
16d	半月孔深さ(右)	4.1	4.0	3.6	3.8	4.5	4.7	3.7	3.6	4.4	5.1		

空欄は計測箇所がないもの。—は計測不能又は計測漏れ。欠は部品欠損。

雅楽(中型)						平家			雅楽(小型)		特殊	計測番号
105	103	96	111	109	102	104	107	100	93	112	110	
雲上	雲鶴	小嵐	満月	野路	千歳丸	鶴吟	武蔵野	文殊丸	小白菊	花月	小車	
90.9	—	—	84.6	86.4	86.7	86.9	—	80.6	78.5	80.0	66.1	1
87.3	—	86.9	84.5	83.7	83.4	85.7	83.4	79.2	77.5	76.1	62.7	2
87.0	86.8	86.9	84.1	83.5	83.0	85.3	83.0	78.8	77.3	75.7	62.6	3
87.0	86.8	86.8	84.1	83.5	83.0	83.8	83.0	78.8	77.3	75.7	62.6	4
86.1	85.5	85.8	82.8	82.3	81.6	83.8	81.5	77.8	76.1	74.4	61.5	5
83.9	82.9	83.5	80.5	80.0	79.7	81.7	79.0	75.6	73.5	72.0	59.3	6
77.5	77.6	79.5	75.0	75.5	74.7	78.0	68.4	70.8	72.0	67.0	53.5	7
3.5	—	3.7	4.5	3.6	4.1	4.0	4.2	4.0	4.0	3.7	3.4	3w
0.7	—	0.6	0.6	0.6	0.6	0.8	0.5	0.5	0.3	0.6	0.4	3w
4.1	4.6	4.0	4.6	4.0	4.3	4.2	4.4	4.5	4.1	3.6	3.6	4w
0.7	—	0.6	0.6	0.8	0.7	0.8	0.6	0.8	0.7	0.8	0.4	5w
2.5	2.8	2.5	2.9	2.2	2.8	2.2	2.7	2.7	2.2	2.4	2.5	6w
2.3	2.2	1.9	2.3	1.8	2.3	2.1	2.3	2.4	2.0	2.1	2.0	7w
0.8	—	1.6	1.8	1.8	1.4	1.7	2.3	1.8	1.4	1.9	1.0	5d
3.2	3.6	3.1	3.2	3.2	3.6	3.3	3.7	3.3	2.8	3.0	3.1	6d
2.1	2.1	1.9	2.0	2.0	2.1	2.8	2.4	2.9	1.9	2.2	2.1	7d
(77.5)	(77.3)	76.8	(75.9)	74.2	(74.7)	(76.5)	(74.1)	(71.5)	(68.5)	68.5	57.2	8
(74.2)	(74.1)	(73.6)	(72.1)	71.4	(71.5)	73.5	(70.9)	(68.8)	(65.8)	(65.2)	52.0	9
(71.4)	(71.1)	(70.5)	(69.1)	(68.5)	(68.5)	70.1	68.4	(65.5)	63.0	62.2	49.6	10
(67.7)	(68.1)	67.6	(65.8)	(65.4)	(65.2)	66.8	65.4	(62.6)	(59.5)	59.3	46.5	11
						(60.9)	(58.6)	(56.5)				12
(2.3)	(2.1)	1.8	(2.3)	1.8	(2.3)	(2.2)	(2.4)	(2.3)	(2.1)	1.9	1.9	8w
(2.4)	(2.3)	(2.1)	(2.4)	1.9	(2.5)	2.1	(2.3)	(2.4)	(2.2)	(2.1)	2.2	9w
(2.6)	(2.5)	(2.4)	(2.7)	(2.0)	(2.9)	2.3	2.0	(2.7)	2.0	2.0	2.7	10w
(3.1)	(2.9)	2.6	(3.4)	(2.6)	(3.4)	2.6	2.3	(3.2)	(3.0)	2.4	3.4	11w
						(5.0)	(5.0)	(5.0)				12w
欠	欠	1.2	欠	1.2	欠	欠	欠	欠	欠	1.3	1.0	8d
欠	欠	欠	欠	1.0	欠	0.8	欠	欠	欠	欠	1.0	9d
欠	欠	欠	欠	欠	欠	0.6	1.3	欠	0.8	1.2	0.9	10d
欠	欠	0.9	欠	欠	欠	0.5	1.1	欠	欠	1.1	0.8	11d
						欠	欠	欠				12d
65.8	65.5	64.8	64.0	62.1	64.0	64.9	62.2	60.2	59.1	57.4	43.7	13
56.5	53.7	52.5	43.2	50.0	53.7	47.9	50.0	43.2	50.8	42.0	接無	14
52.2	51.5	54.2	42.5	50.1	54.2	48.2	48.8	43.2	不明	42.0	接無	14
39.8	40.2	40.8	39.4	39.3	40.5	40.3	38.8	36.8	39.1	34.8	25.6	15
37.8	38.0	39.9	37.3	37.4	38.5	38.3	37.0	35.1	37.3	33.2	24.4	16
35.7	36.2	37.8	35.3	35.5	36.4	36.5	35.7	33.3	35.6	31.5	23.4	17
3.5	3.8	3.3	3.9	3.5	3.7	3.7	3.2	3.7	3.3	3.0	2.8	13w
12.8	14.0	13.2	19.8	13.5	10.0	15.8	12.2	14.3	8.7	14.8	接無	14w
12.6	15.0	15.4	12.9	13.4	14.8	—	14.1	12.0	12.5	13.1	8.6	15w
13.5	14.7	14.7	12.6	12.9	—	13.4	14.0	11.8	11.1	13.0	8.9	16w
1.3	1.5	1.5	1.2	1.2	0.9	1.3	1.2	1.1	1.1	1.0	0.9	16w
12.7	15.2	15.2	12.9	13.4	15.3	—	14.2	12.1	12.4	13.2	9.1	17w
3.3	3.2	2.6	3.4	3.5	3.1	3.2	2.9	2.9	2.7	2.6	2.9	13d
0.6	0.6	0.7	0.8	0.4	0.7	—	0.9	0.6	0.5	0.7	0.7	13d
3.7	—	4.4	3.7	2.6	3.8	3.3	—	3.2	2.8	2.7	2.5	16d
3.7	—	4.3	3.6	2.6	3.8	3.4	—	3.2	2.6	2.7	2.5	16d

部位	位置	計測番号	分類 H-46番号 銘	雅楽(大型)											
				95	92	101	97	99	113	98	108	106	94		
				朝陽	白鳳	嘉吉丸	美女	花園	白菊	筑夫島	白神	嘯月	箕面		
表	撥面・落帯	18	撥面上端	32.0	32.3	32.2	31.0	31.9	32.3	31.5	32.2	29.4	28.2		
		19	月上端										19.2		
		20	最大幅位置	21.5	22.0	22.5	22.5	21.3	20.5	20.0	19.0	20.0	17.5		
		21	最大厚位置	21.5	22.0	22.5	22.5	25.0	—	27.5	17.5~25	—	25.0		
		22	落帯端 左	19.3	11.5	19.4	15.0	20.2	16.3	20.9	23.0	17.7	19.0		
		22	落帯端 右	19.5	20.1	17.9	18.5	20.8	17.7	20.3	19.0	18.4	18.3		
		23	撥面下端	15.8	15.9	16.2	14.1	15.0	13.9	14.8	15.2	13.3	12.9		
		18w	中央板幅	14.0	13.6	18.9	22.8	15.3	13.8	18.0	13.0	13.4	14.7		
		18w	腹板全幅(沿)	37.3	37.4	37.8	38.7	36.8	37.0	35.3	33.4	36.6	33.6		
		19w	月直径										3.6		
		20w	腹板最大幅(沿)	40.1	40.8	40.8	40.8	39.5	40.1	38.7	38.5	38.6	35.7		
		22w	落帯全長(沿)	62.9	53.4	61.1	56.6	62.8	57.5	63.9	63.8	58.8	58.7		
		23w	腹板全幅(沿)	39.4	38.8	39.8	38.0	37.4	37.8	37.6	37.6	36.5	34.0		
		21d	最大厚	7.9	7.7	7.2	7.9	8.7	7.9	6.7	7.8	7.8	7.1		
		21d	腹板膨らみ	1.1	1.6	0.9	1.8	0.9	0.7	1.4	1.1	1.6	0.7		
		21d	腹板厚(左)	0.8	0.7	0.9	0.8	1.1	0.9	0.7	1.1	0.7	1.1		
		21d	磯厚(左)	3.9	3.3	3.8	3.8	4.1	3.0	3.3	3.9	3.5	4.0		
		21d	槽膨らみ	3.0	1.7	2.6	2.4	3.8	3.3	2.5	2.8	2.7	2.5		
		22d	落帯中央幅	3.5	3.3	3.2	3.1	3.3	—	3.2	—	—	3.3		
		裏	覆手・隠月	24	覆手先	14.5	14.4	14.9	12.9	13.2	12.8	12.4	15.1	12.5	12.4
				25	通弦孔中央	11.6	11.2	11.9	10.6	10.3	10.6	9.8	12.1	10.5	9.9
				26	覆手最高位置	9.0	10.0	10.0	9.0	8.9	8.2	9.8	9.9	9.0	8.5-9.0
27	覆手元			5.1	5.5	5.4	5.0	5.2	4.5	4.9	5.9	5.0	4.5		
29	隠月上端			13.4	13.7	12.5	11.7	11.7	—	11.6	12.6	10.9	11.1		
30	隠月下端			9.1	8.3	8.4*	7.7	7.7	—	6.8	8.5	7.9			
24w	覆手先幅			11.6	13.0	12.9	13.2	13.2	14.1	12.1	12.5	12.7	12.0		
27w	覆手元幅			17.5	17.9	17.7	18.0	17.5	18.2	17.4	18.1	16.3	16.8		
29w	隠月幅			5.0	5.7	5.2	6.2	6.1	—	5.2	8.4	6.7	7.7		
24d	覆手先中央			1.4	1.5	1.5	1.5	1.6	1.2	1.3	0.9	1.2	1.0		
26d	覆手高さ(左)	2.0	2.0	2.3	2.1	—	2.1	1.6	2.1	1.8	1.8				
裏	頸・槽	31	反手下	95.1	96.0	96.0	95.5	94.2	93.0	91.5	91	91.1	86.8		
		32	猿尾下	93.2	94.2	94.3	94.0	93.4	91.8	89.5	89	89.9	85.6		
		33	甲側匡口(沿)	75.5	75.8	76.3	75.8	74.8	73.0	72.8	70.4	71.9	68/4		
		34	遠山肩(左)	58.3	57.4	59.0	58.0	57.0	55.5	54.5	52.2	55.3	51.5		
		35	三枚接上端 左	直甲	直甲	直甲	直甲	47.0	68.2	直甲	70.4	直甲	49.1		
		35	三枚接上端 右	直甲	直甲	直甲	直甲	46.9	2枚	直甲	2枚	直甲	49.8		
		36	遠山先	48.6	48.2	49.2	49.0	47.1	46.1	45.3	43.7	46.3	41.8		
		31w	頸幅	2.5	2.2	2.1	2.1	2.5	2.9	2.9	2.9	2.7	2.3		
		33w	頸幅	3.9	3.9	3.7	3.8	3.1	4.0	4.0	3.1	3.6	3.7		
		34w	全幅(沿)	17.3	19.1	18.4	18.0	17.3	18.0	18.4	16.0	18.0	16.2		
		34d	磯厚(左)	4.1	3.5	3.9	3.9	3.7	4.0	3.5	3.5	3.7	4.1		
		34d	腹板厚(左)	1.1	0.6	0.8	0.7	0.7	0.9	0.5	0.8	0.7	0.9		

雅楽(中型)						平家			雅楽(小型)		特殊	計測番号
105	103	96	111	109	102	104	107	100	93	112	110	
雲上	雲鶴	小嵐	満月	野路	千歳丸	鶴吟	武蔵野	文殊丸	小白菊	花月	小車	
27.7	28.5	28.1	26.9	25.5	27.4	28.2	25.0	26.2	24.3	24.8	19.3	18
				21.1		25.5		23.6				19
20.5	18.5	19.5	18.8	19.5	20.0	20.0	19.0	17.0	16.4	17.5	12.5	20
18~20.5	*	19.5	15~17.5	20.0	20~25	17.5~20	—	20~25	15.5	20.0	12.5	21
	13.8	14.7	14.7	12.8	12.7	17.5	15.0	15.7	16.1	15.2	12.2	22
	13.8	14.1	14.6	12.1	14.1	17.5	15.5	15.7	16.1	13.2	12.2	22
12.6	14.0	13.1	12.9	11.9	14.1	13.1	13.2	12.8	11.7	12.5	11.0	23
11.8	14.2	13.5	18.9	13.7	10.3	15.6	13.2	14.4		14.7		18w
31.6	30.4	34.7	31.5	31.3	31.5	31.4	32.0	27.5	30	27.8	21.7	18w
				3.5		3.3		2.8				19w
33.3	35.0	35.7	33.6	32.4	33.5	33.2	33.2	29.9	31.6	29.6	23.8	20w
51.3	47.5	48.5	49.7	43.2	46.5	51.0	48.8	28.6	49.5	46.7	37.8	22w
31.8	34.2	33.3	32.2	30.2	32.5	31.9	32.5	29.0	31.0	28.1	24.0	23w
6.4	—	6.4	6.4	6.2	6.5	6.5	6.2	6.4	5.6	5.6	5.3	21d
1.1	—	0.9	0.9	0.3	1.1	0.8	—	0.9	1.3	0.5	0.8	21d
1.1	—	0.9	1.0	0.8	1.0	1.1	0.9	0.9	1	0.8	0.8	21d
2.8	—	3.3	4.0	3.5	3.3	3.9	3.4	3.5	3.2	2.9	3.1	21d
1.5	—	2.3	1.5	2.5	2.0	1.7	—	2.1	1.1	2.2	1.4	21d
—	—	—	—	3.0	—	3.4	3.2	2.8	2.8	—	2.5	22d
12.0	12.4	12.5	12.3	11.6	12.7	12.5	12.4	12.3	10.9	11.1	10.2	24
9.8	9.9	9.9	9.5	9.4	10.5	10.0	10.0	9.8	9.5	9.0	8.4	25
7.8	7.9	8.8	8.2	8.5	9.3	8.5	9.0	8.0	8.0	6.5	7.7	26
4.7	4.6	5.3	4.3	4.2	6.2	5.0	5.0	4.8	5.0	4.7	4.4	27
10.8	11.6	12.6	11.5	11.0	12.4	10.9	10.9	10.8	10.5	12.4	8.9	29
7.7	7.4	7.9	7.3	7.2	8.4	6.6	7.1	7.1	6.8	7.9	5.6	30
11.7	11.6	11.4	11.8	11.5	10.3	11.7	11.6	11.8	9.7	11.5	8.7	24w
15.7	16.8	15.8	15.9	16.0	15.2	15.7	15.8	15.4	14.3	14.9	12.1	27w
6.4	5.8	5.5	5.5	—	6.3	6.4	6.5	6.0	—	6.7	4.5	29w
1.1	0.7	1.3	1.0	—	0.9	1.1	1.1	—	1.2	0.6	1.1	24d
1.8	2.0	1.9	1.8	1.7	1.6	1.8	1.7	1.8	1.4	1.9	1.4	26d
84.2	83.5	—	81.1	80.8	79.7	82.2	—	76.1	73.9	72.5	59.1	31
83.2	81.3	—	79.5	79.5	77.8	81.0	78.2	74.1	72.0	70.5	58.1	32
65.0	65.2	63.7	63.3	61.9	62.7	63.9	—	59.1	58.4	56.8	43.1	33
47.5	50.7	—	46.4	49.0	47.0	49.0	—	44.6	46.1	44.8	32.5	34
不明	45.0	不明	42.6	49.8	直甲	51.0	3枚	43.2	直甲	直甲	18.5	35
不明	45.2	不明	37.0	49.8	直甲	51.5	3枚	43.4	直甲	直甲	2枚	35
37.8	39.9	—	36.9	41.2	39.1	41.0	—	37.3	35.7	38.3	26.3	36
2.5	2.8	—	2.9	2.3	2.8	2.1	—	2.7	2.1	2.4	2.4	31w
3.7	4.2	—	4.2	3.8	3.9	4.0	—	3.8	3.2	3.0	3.0	33w
16.0	15.8	—	16.7	13.9	16.0	14.4	—	12.3	12.4	11.8	10.0	34w
3.6	2.7	—	3.9	3.5	3.4	3.7	—	3.5	2.9	2.8	3.0	34d
0.7	—	—	1.0	0.7	0.8	0.9	—	1.0	0.7	0.7	0.7	34d

部位	位置	計測番号	分類 H-46番号 銘	雅楽(大型)										
				95	92	101	97	99	113	98	108	106	94	
				朝陽	白鳳	嘉吉丸	美女	花園	白菊	筑夫島	白神	嘯月	箕面	
反手	海老尾	38	反手全長	24.2	23.0	21.5	23.1	21.2	22.5	22.7	23.7	21.7	20.7	
		39	海老尾先	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	海老尾	40	最大幅位置	1.3	1.8	1.6	1.5	1.8	1.4	1.6	1.8	1.3	1.7	
		41	海老尾元	7.8	7.9	8.0	7.8	8.0	7.6	7.8	8.0	7.6	7.3	
		42	弦門上端	7.8	7.9	8.0	7.8	8.0	7.6	7.8	8.0	7.6	7.3	
		40w	最大幅	7.4	7.8	8.2	7.6	7.8	7.8	7.8	7.8	7.1	7.7	6.8
		42w	弦門材幅	0.8	0.8	0.9	0.8	0.8	0.9	0.8	0.9	0.8	0.8	0.8
		42d	弦門外幅	3.0	2.9	3.0	2.8	2.8	3.0	2.8	2.9	2.8	2.9	2.9
	転手	反手	42d	弦門上端反手厚	3.0	3.3	3.5	2.8	3.0	2.8	3.0	2.9	2.5	3.2
			43	転手孔中央Ⅰ左	1.4	1.3	1.4	1.5	1.8	1.5	1.0	1.9	1.1	1.3
			43	転手孔中央Ⅰ右	1.3	1.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.2	1.8	1.2	1.4
			44	転手孔中央Ⅱ左	4.5	4.2	4.1	4.3	4.5	4.4	3.9	4.5	4.3	4.2
			44	転手孔中央Ⅱ右	4.2	3.9	4.0	4.2	4.4	4.4	3.9	4.3	4.2	4.4
			45	転手孔中央Ⅲ左	7.3	6.9	7.1	7.3	7.3	7.4	6.8	7.4	7.2	7.3
			45	転手孔中央Ⅲ右	7.2	6.8	7.2	7.4	7.1	7.3	6.5	7.5	7.3	7.4
			46	転手孔中央Ⅳ左	10.5	9.9	9.9	10.2	9.8	10.0	9.4	10.5	10.3	10.4
			46	転手孔中央Ⅳ右	10.3	9.8	9.9	10.2	9.8	10.1	9.3	10.7	10.3	10.6
			43w	転手全長Ⅰ	12.8	13.6	14.0	13.8	14.4	14.3	12.7	13.0	12.1	13.7
			44w	転手全長Ⅱ	13.6	13.6	14.1	14.3	14.3	14.5	12.7	13.9	12.2	14.1
			45w	転手全長Ⅲ	13.4	13.7	14.0	13.6	14.1	14.9	12.9	13.8	12.5	14.4
			46w	転手全長Ⅳ	14.1	14.2	13.9	13.5	14.2	14.8	13.2	13.5	12.9	14.7
			43d	転手太Ⅰ	1.9	2.1	2.1	2.0	1.9	2.2	1.7	2.0	1.9	2.0
			44d	転手太Ⅱ	1.9	2.1	2.0	2.0	1.9	2.2	1.7	1.87	1.8	2.0
	45d	転手太Ⅲ	1.9	2.2	2.0	2.0	1.9	2.2	1.8	1.98	1.9	2.0		
	46d	転手太Ⅳ	1.9	2.2	2.0	2.0	1.9	2.2	1.7	1.87	1.9	2.0		
	乗弦周辺	反手	48	弦門下端	22.0	20.9	20.8	20.6	21.5	20.3	20.4	21.1	19.8	20.2
			50	反手材先端	—	21.1	22.1	21.5	21.1	21.1	21.2	21.5	20.7	21.2
			51	乗竹先端	23.8	23.0	22.9	22.6	22.7	22.3	22.5	23.3	21.2	22.2
			52	乗弦先端	24.5	23.9	23.4	23.0	23.2	22.8	23.0	23.9	21.9	22.6
			48w	弦門材幅	1.2	1.1	1.0	1.0	1.1	1.0	1.0	1.2	1.0	1.0
			48w	弦門外幅	4.8	4.5	4.5	4.2	4.6	4.2	4.5	4.8	4.1	4.0
			50w	反手先上幅	5.0	4.7	4.8	4.5	4.8	4.3	4.8	4.9	4.2	4.1
			50w	乗弦元幅	4.4	4.3	4.5	4.1	4.4	3.7	4.4	4.2	3.8	3.8
51w			乗竹幅	1.5	1.3	1.3	1.8	1.3	1.8	1.5	3.6	3.3	3.4	
52w			乗弦先幅	2.1	2.0	2.5	2.4	1.9	1.9	2.3	1.7	2.3	1.7	
48d	反手厚	3.6	4.0	4.0	3.0	4.1	4.3	4.2	3.8	3.2	3.8			
50d	乗竹厚(中央)	—	0.2	0.3	0.2	0.1	0.4	0.2	0.3	0.3	0.3			

雅楽(中型)						平家			雅楽(小型)		特殊	計測 番号
105	103	96	111	109	102	104	107	100	93	112	110	
雲上	雲鶴	小嵐	満月	野路	千歳丸	鶴吟	武蔵野	文殊丸	小白菊	花月	小車	
19.6	21.5	22.7	20.4	19.0	21.0	18.8	—	19.7	20.8	20.0	19.1	38
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	39
1.2	1.4	1.0	1.7	1.5	1.9	1.4	1.3	1.5	1.9	1.2	1.0	40
6.5	7.6	7.6	6.9	6.8	6.5	6.9	6.5	6.3	7.1	6.0	6.0	41
6.6	(7.6)	7.6	6.9	6.8	6.5	6.9	6.5	6.3	7.1	6.0	6.0	42
6.8	7.7	7.2	6.6	6.1	5.7	6.6	7.7	6.3	6.8	5.7	6.0	40w
0.8	0.8	0.7	0.9	0.6	0.8	0.8	0.9	0.7	0.6	0.6	0.6	42w
2.6	3.0	2.9	2.9	2.7	2.9	2.7	3.1	2.8	2.6	2.6	2.5	42w
2.8	3.1	2.7	3.0	2.4	2.9	2.8	3.1	3.1	3.0	3.0	2.8	42d
0.9	1.6	1.5	1.6	1.3	1.4	1.6	1.3	1.3	1.6	1.8	1.4	43
1.1	1.7	1.8	1.6	1.3	1.3	1.8	1.9	1.3	1.4	2.0	1.3	43
3.9	4.6	4.1	4.2	3.7	3.9	3.9	4.3	4.1	4.4	4.8	4.0	44
3.9	4.4	4.4	4.1	3.3	4.0	4.0	4.3	4.2	4.1	4.6	3.4	44
6.9	7.6	7.4	6.7	6.5	6.6	6.5	7.2	7.0	7.1	7.5	6.5	45
6.9	7.4	7.4	6.6	6.0	6.6	6.4	7.1	7.1	6.9	7.1	6.1	45
9.6	10.6	10.4	9.0	8.8	9.3	8.8	9.9	9.5	9.8	9.8	8.7	46
9.7	10.5	10.3	9.1	8.8	9.3	9.0	1.2	10.0	9.8	10.0	8.2	46
12.5	12.4	14.1	13.1	12.0	13.3	12.4	12.9	13.6	12.6	13.1	11.5	43w
12.3	13.0	14.3	12.9	12.4	13.4	11.8	13.6	13.7	13.0	13.0	11.2	44w
12.0	13.6	13.9	13.5	12.5	13.4	11.7	13.1	12.9	13.0	13.1	11.5	45w
12.7	13.8	14.0	13.3	12.4	13.7	12.6	13.2	13.7	13.0	13.1	11.2	46w
1.9	1.9	2.1	1.9	1.9	1.9	2.0	2.1	1.9	2.0	2.3	1.9	43d
1.9	1.9	2.1	1.9	2.0	1.9	1.9	2.1	1.9	2.0	2.3	1.9	44d
1.9	1.9	2.4	2.0	1.9	1.9	1.9	2.1	1.9	2.0	2.3	1.9	45d
1.9	1.9	2.1	1.9	1.9	1.9	2.0	2.0	1.9	2.0	2.3	1.9	46d
17.8	乗竹欠	20.3	19.5	17.9	18.1	18.2	—	20.0	20.4	17.5	17.6	48
18.8	14.3	21.3	20.2	—	19.0	19.2	19.6	20.3	20.5	17.8	18.0	50
19.8	欠	22.5	21.8	20.2	20.6	20.9	—	21.8	21.8	19.5	18.7	51
20.0	—	23.0	22.4	20.6	20.9	20.9	22.0	22.0	22.4	19.8	19.2	52
0.9	1.1	0.9	1.1	1.0	0.9	1.0	1.2	0.9	1.0	0.8	0.9	48w
3.9	4.5	4.0	4.5	3.9	4.2	4.0	4.2	4.4	3.9	3.6	3.6	48w
4.1	4.6	4.0	4.6	4.1	4.3	4.2	4.3	4.5	4.1	3.7	3.6	50w
3.4	—	3.7	4.5	3.6	4.1	4.0	4.2	3.7	4.0	3.7	3.4	50w
3.1	欠	1.3	4.0	3.6	3.9	1.2	3.9	1.7	1.6	3.3	2.8	51w
1.9	—	2.0	2.1	2.2	1.8	2.1	2.4	1.9	2.4	1.7	1.5	52w
3.4	3.8	3.3	3.6	*3.4	3.6	3.4	4.1	3.9	3.8	3.8	3.6	48d
0.3	欠	0.1	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4	0.3	0.2		0.1	50d

(薦田治子作表)

***Biwa* of the Heirloom of Kishu-Tokugawa Family**

KOMODA Haruko

This article reports the research on the *biwa* in the musical instrument collection of the heirloom of the Kishu-Tokugawa Family held at the National Museum of Japanese History in 2009 and discusses the research results. This research was conducted on 22 pieces of Japanese *biwa* excluding Chinese pipa among 23 pieces of *biwa* in the same collection.

The first purpose of this research was to provide the basic data through observation and measurement, which was used to study the characteristics of *biwa* as musical instruments. The second purpose was to clarify the structure and manufacturing technique of *biwa* through radiography of the body and observation of the inside of *sô* (back board) with a small camera. The third purpose was to observe the characters written in *sumi* ink inside the back board using a small camera. In the body of *biwa*, information written in *sumi* ink about the manufacturing and repair of the instrument was often found. It has a higher authenticity than the information of the accompanying documents, which may have been replaced or created.

The outcomes of the research conducted for the purposes described above are as follows:

First, it was considered appropriate to classify the *biwa* into the following three groups: large-, medium- and small-sizes, based on the measurement results. There were eight medium-sized *biwa* of more than 80 cm but less than 90 cm, and this size of *biwa* may often have been used as with large-sized *biwa*. Conventionally, medium-sized *biwa* and small-sized *biwa* of less than 80 cm were hardly discussed. There are few small-sized *biwa*, which had particular uses. So they should be separated from medium-sized *biwa* from now.

Next, the basic structure of *biwa* could be observed using the Unkaku (H-46-103) that was disassembled, and through the observation and radiography of the inside of body with a small camera, the special structure of *biwa* was revealed.

Furthermore, the adhesive traces of 5 frets show that 3 pieces of *biwa* were obviously used as the *heikebiwa*. Judging from the documents and the shape of plectrum, it is considered that the 3 pieces of *biwa* were added to this collection so that they were used as the *gagakubiwa*. Basically, the *heikebiwa* is similar to the medium-sized *biwa* of Gagaku. The differences are in the accessorial parts such as the moon-shaped decoration on the plectrum-face, frets and upper bridge. Therefore, it was found that it

was possible to use the *heikebiwa* as the *gagakubiwa*.

Many other things such as the ideas on manufacturing of details and the repair method were clarified through the observation. Also, it was found that the plectrum, which had been considered to be the plectrum for *heikebiwa*, was the plectrum for the *môsôbiwa* in the Satsuma Domain, and one aspect of the musical instrument history of the *satsumabiwa* was revealed.

The measurement results of this research can be used in various ways. The effectiveness of the observation of the inside of the *sô* (back board) and the radiography was verified, which indicates the future direction of instrument research for *biwa*.

Key words: *gagakubiwa*, *heikebiwa*, Nameplate in *sô* (back board),
Measurement of musical instruments, Study of musical instruments